

川柳塔

昭和四十二年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十八年六月二十五日印刷
昭和四十八年七月一日発行（毎月二日発行）
創刊大正十三年 通巻五五四号



No. 554

巻頭作家フェスティバル

七月号



清酒
日本盛
ニホンサカリ

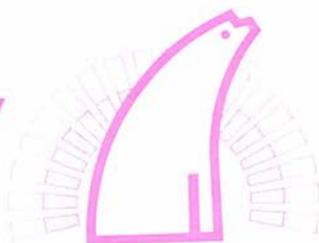
灘 西宮酒造 醸

超特撰 (化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、四一〇円



超特撰 日本盛
みがきぬかれた 灘の酒

えらばれ



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・メロン・パイナップル・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



〔出張販売〕高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば



亡母憶うこの石段の数を読み
笑われてから雑魚なりの斗志湧く
お師匠さんのおり猿真似の舞扇
句碑除幕久々のお辞儀拾われる
海猫のどん慾なまでに夢恋う日



たましま川柳大会で兼題「天」の披露する主幹（カメラ岳人）

無理するな

中島生々庵

五月はよく旅行した。三日夜から七日の朝大阪に帰るまで、佐賀、博多。十二日夜から出雲の日御碕までトンボ帰りの寝台車。二十日早朝から岡山県の玉島まで日帰り。二十七日は京都市内の一日。旅から帰えると職場の仕事や原稿の締切日が山積して待っている。自分でも、よくまあ無理のきく駄だと思ふ。心臓や脳血管をやられた経験のある友人は非常に心配してくれるが、結局、無理するな無理するなのご意見なれどである、一晩熟睡すると翌日はけろりとして居る。それが油断大敵と言うものだ。転ばぬさきの杖だと友人はしきりに忠告する。又別の友人が言うには、老骨は仕方ないとして、老衰はするなと、判ったような判らぬような事を注意してくれる。第三の友人は曰く、古い時代を振り返る事と、古い時代に逆行りする事は厳しく区別せよ。何時までも若い頭であれ、古きをたずねてもいいが、頭まで古い時代に逆行する事はまかりならぬ。という意味の教えであらう。

川柳塔七月号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い (路郎)

私の句

戸を開ける音さえ違う長女次女

黒川紫香

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

無理するな

中島生々庵 (1)

路郎忌を迎えて

川村好郎 (2)

川柳初篇研究

(百二十)
前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸
博美・藤井和雄
十府・岡田甫

白狐と川柳連

東野大八 (22)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

北川春巢選 (30)

一分間の柳論

川口弘生 (51)

秀句鑑賞 (同人吟)

川村好郎 (28)

四八年度二賞候補作中間発表

西尾菜 (29)

文鳥

本田恵二郎 (51)

近詠

諸家 (47)

路郎忌を迎えて

川村好郎

路郎先生御逝去されて早や八年、路郎忌を迎え感慨一入のものがある。

凡そ祖先又は恩師等故人の忌日には感謝の意を持ち、墓前靈前に故人の好物を心尽して供え、お慰め申上げご冥福を祈り、在りし日の思い出偉業を偲ぶことは大切ではあるが、その子孫、弟子孫弟子ひ孫弟子等が今どんな生き方をしているか、故人が今ご覧になって果して喜んで頂くような生活心構えと取組んでいるかを反省し、心新たに御先祖に、恩師に喜んで頂く生き方を誓い進めてゆくことが一層意義ある忌日の迎え方であると信ずる。

路郎先生は短詩文学として圏外に置かれていた川柳を現在の文字の地位に押し進め、川柳の社会化に一生を賭けた第一人者であり、川柳は人間陶冶の詩と叫び、生命ある句を創れと教えてつけられた。

川柳社会化がどこまで進められてきたのであろうか。我々弟子等果して生命ある句を創りつつあるだろうか。まことに慚愧に堪えな

川柳中山道六十九次：(6)

富士野鞍馬

(26)

キリストの

高鷲垂鈿

(45)

巻頭作家フェスティバル

橋高薫風

(38)

没食子・形水・潮花・一三夫・旅風・水客・薫風・古方・柳志・野迷路

甲吉・久米雄・拳法・静水・滋雀・静馬・恵二朗・阿茶・一栄・花村・

奈良子・静観堂・水車・喜由・文秋・千万子・里風・圭井堂・緑之助・

美代・千梢・白汀・千翁・求芽・明朗・克枝・酔夢・正朗・葵水・

史好・牧人・菁居・雀踊子

爽やかな大会

板尾岳人

(46)

尼緑之助句碑除幕式に参加して

清水一保

(37)

雅号ぶっちゃげばなし

浜畑胡蝶

(6357)

初歩教室

本田恵二朗

(50)

大萬川柳「ナイフ」

川村好郎選

(52)

柳界展望

(新之助)

(5654)

本社六月句会

森井菁居

(48625)

各地柳壇(佳句地10選)

有信新之助選

(48625)

一路集

和田一乃字選

(48)

「甘言」

北村三歩選

(49)

「土言」

(二三夫・葉子)

(6549)

編集後記

座右の句

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち (生々庵)

私の句

遭難の遺品ライターまだともし

森田布堂

い感がするのである。

十数年前、先生の御命にて羽曳野療養所へ川柳指導に行くことになった。その時先生はなぜ没句になったか、没句を添削し説明することも悪くは無いが悪い句を少々添削しても大した句にならないし、句は上達しない。それよりも必ず名句佳句を示し、川柳とはこれだと教え、その人たちを通じ、正しい川柳を広く世間に教え込まねばならない。と同時に君も初心の句を選ばかりしておれば君の句も荒れて手が下るから必ず先輩の名句を味読して勉強するようにと教えられた。

初めて柳話を仰せ付かった時、あとで君の話はくど過ぎる。老若男女種々の生活環境にある人たちの前で話すなら囁んで含めるように言わねばならないが、川柳をする人は常に省略する事を勉強している。君自身も生活のすべてに取捨選択をせねばならない。それが川柳だと諷められた。路郎忌を迎え、改めて忘れられないこれ等の教えを反芻するのである。

来年は川柳塔十周年記念になる由。この間私はどれだけ川柳塔のために働いてきたであろうか。先生に対してお詫びするより外がないのである。ただ牛歩ながら川柳を続けていることが喜んで頂く唯一のものであろう。



若本多久志選

倉敷市 水粉千翁

まっ黒く培う土のころ炎え
花道が切れてわたしの足音だ
指もれる砂に怒りの音がない
万策は尽きたが白い雲を追い
孫の数その幸せの中に居る

大阪市 正本水客

勢ぞろいする庭下駄へ陽がとどき
追伸のしばらく心に残ること
思い出なんて嘘だと云える若さ持つ
通夜の灯に舌鼓する眼と出会う
根の深い女に心さわられる

青森市 工藤甲吉

世の中の乱れ金色夜叉ばかり
日曜は旗日をおんぶしなくなり
その頃の女房は十九光ってた
愛されぬ代わり囲われない雀
子が母を思う日母も子を思い

高槻市 若柳潮花

人生の幕七分降り八分降り
春雷へ身をふるわせて散る桜
肱枕すねた姿に似てわびし
鶯の声たしかめる足を止め
波しぶき若狭の春のまだ浅く

八尾市 高杉鬼遊

美しき貌美しく見て恋を見し
吊り革の掌に啄木の詩がゆれ
炎えること忘れて夫婦茶漬食う
見捨てられてからの桜が実を結び
月上弦レールの上で寝る電車

岡山県 浜田久米雄

聞き役にまわるたばこの二三本
米があるのにパン食が好きになり
気持だけ動いて足がついて来ず
どうかなるだろうはこの世許さない
歌手唄う恋とキッスの歌ばかり

門真市 福島 鉄児

お迎えが来れば応じてやる心境
制服の肌は女になった艶

イミテーションでよし今の倅抱きしめる
着飾って心貧しき日なりけり

黙々と善人日蔭に甘んじる

豊中市 戸田 古方

孫娘だけこんなおじいちゃんにおじいちゃん

録音で間に合いそうなスト・ニュース

雷のあとの鶯ほめられる

土の民八十八夜疑わず

流行みたいにくツクリズムやいいだして

大阪市 本多 柳志

孫と出て又信号が赤になり

女哀し裏地に紅をまだ残し

会うている時計別れる秒も読み

騙されて根の無い花へ水をかけ

春がまだ足踏みしてる通りぬけ

倉敷市 本田 恵二朗

心の灯消すまい今日も血をそそぐ

番傘が屋号たんで世をかこち

若い気が過ぎて腰骨悲鳴あげ

駅一つ一つ拾うて旅のどか

階段の手すりの価値がわかりそめ

奈良県 石倉 旅風

耳掃除釣れた魚のように見せ

春の風土筆は脊伸びしたかろう

あんなこと言わなくて済む仕合わせさ

物価高とうとうくじを買いはじめ

陽が沈む今日もキッチリ生駒山

宝塚市 傍島 静馬

テレビドラマいまわの際によく喋り

前歴は絆筋らしい身のこなし

団地の青窓に吊したシノブ草

小ぎれいな容器残しておいては放かし

嫁姑同居をすれば不審がり

松原市 谷垣 史好

告白が本気にされぬ下り眉

帰るべき故郷もなしギター弾く

冷めた茶をのんで正論ゆずらない

膝枕男冥利の目をつむり

鉄橋に夕日倅せまだ遠い

大阪市 小出 智子

幸せな一日机に頬をつき

正座して神の疑問に突き当り

心の奥の虚へ落ちる雨の音

春の海こざかしき身を嘲笑う

次男と演奏会にゆく

満ち足りた余韻へ胸のギター鳴る

姫路市 梅谿庵 不酔

表札が二枚掛けて独り者

重宝な扇子が槍に黒田節

お器用な小指扇子に文を書き

温室で売られるだけの実をつける

ダイヤルがどこで違ったかどなられた

氷見市 関 美子

心貧し男なぐった夜の底

明日を見失ないそう波に問う

追憶はここまで停車ボタン押す

血まみれのイルカ少年の面影残して

あがいても宇宙船地球号の中

富田林市 板尾岳人

山男母に抱かれた日もござる

草も木も小石も山を味方する

山波へ水平線が続く夢

山を抱く雲ふんわりと母の膝

あの峰が画になる姿おとなしい

大阪市 大坂形水

週休二日朝の寝床で背伸びする

来賓の席で居眠り出て困り

使い途知らない奴へ金が集り

真んどうの大阪商人土地やらぬ

風呂好きに風呂が一っぺんも出ぬドラマ

豊中市 橘高薫風

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

この句碑のはじめて会うてなつかしさ

目にも見せんとキャッチャーフライかな 小選挙区制流産

陶枕に睡蓮恋し女人より

清輝忌わが娘の髪に見とれおり

大阪府 不二田 一三夫

奇形児のビルがうごめき都市狂う

後ろ姿にドラマがあり 喪服

この上は悪運だけが頼りなり

寄 席

寝たふりで出番待ってる老芸人

トリオの一人が他人だから割れ

尼崎市 黒川紫香

どこでどう迷よたか都会に居る蛙

悪じゃれがとうとうひとりぼっちにし

母負うた息子の肩に散る桜

常照皇寺

北朝の君の涙か桜落つ

鳥取市 河村日満

大阪にて(二句)

決断と実行市バスの値も上り

春斗勝利拳揃えて天を衝く

菓子一つ二つ仏に詫びて減り

星影逝く

ベルまさか君の計を聞く受話器とは

高槻市 福田丁路

七〇に近く一旗上げたる氣
マイカーの行くも戻るもならぬ列
連休は楽し朝湯で転寝す
晴耕も雨読も夢の夢だった

松江市 中川 晃 男

尾緑之助先生句碑除幕

句は読まず句碑をバックに撮ってゆき
句碑ひとつ夕陽に残して皆帰り
どなたも先生と呼んで司会気が疲れ
おいしい空氣吸うて大阪へ帰りやはり

岡山県 直原 七面山

刺激が欲しいと幸せな妻
酔えば口つく軍歌の数々
親友を敵に廻わして町議戦
土鈴の音に古き日本の心を見

香川県 三井 醉 夢

高知朝市(二句)

フェニックス揚げば青い国があり
はるばると来て買い漁るなすきゅうり
ハイネの詩娘の暗誦によどみなし
駆けぬける子のあし音が母の日に

倉敷市 臼井 三林坊

みみずくが鳴きふる里をかみしめる
大大阪親にそむいた程でなし
売れ残り三面鏡へ舌を出し

ガソリンも電気も無い日思えかし

岡山県 嘉数 千代香

ひとりいる闇に幼なき日の山河
仮面着てみたが逃げ切る道がない
良心を写す鏡を拭いている
精薄児抱えて遠き虹に佇つ

大阪市 有信 新之助

三十時間ほしい時計の下へ寝る
虚栄心の昂りに母の血がめぐる
よく売れた日わずらわしい終い客
背合わせでふとん崩れぬ齡と齡

藤井寺市 西 いわを

腹見せているが蛙に臍がない
濃い緑一色となり塔沈む
生きて行く裏と表を見極める
高速道路蟻も這うては居られまい

下関市 石川 侃流洞

へちまぶらぶらもうすぐ冬が来るんだぜ
インスタントさえも子供に頼る妻の留守
給料前またラーメンの昼である
残業の腹をチャルメラ知っている

泉佐野市 阿万万 万的

落人の里若葉は人の情に似て
春がもえてる大和の村の桃畠
キャンパス一杯春をぶつつけてる構図

陽を受けた石仏ひとり過疎まもる

大阪市 山川阿茶

赤十字血液センターへ勤務

友情を涙で受けて通勤車

似非善意見すかされてる献血場

赤十字へつとめる喜寿の春うらら

赤十字のマークほのぼの献血車

大阪市 福井野迷路

どうにでも廻る舌だよ骨がない

人生の遺品苦笑のデスマスク

恍惚もお金は若干はつきりし

一言を押えて仲のよい夫婦

桜井市 岩本雀踊子

冷たいお人へ女がもえている

花の春私の財布がやせていた

下積みの暮らしへぬけぬ国訛

だまされていたのも妻の智恵だった

倉吉市 奥谷弘朗

正面へ床を背にして五ツ紋

ゆっくりりと歩く牛にも教えられ

給料日だけの笑顔で小役人

本腰で生きる時計のネジを巻き

神戸市 小浜牧人

バラ開く朝の心を失わず

仕合せの芽を出す種を一つ植え

子を叩く親の痛みを子は知らず
疑えば愛は痛みをもってくる

大阪市 中川滋雀

風化するえにしを老いの温め合い

二三日病んで弱気がなお癒えず

五月雨へ若葉は息吹く色で受け

騒音にとけパチンコへ無我となり

島根県 堀江正朗

握手した想い出温い人ばかり

晩酌の追加ぐつすり朝になり

ひとときがこんなに長い妻の留守

いいお月さんねと妻の独りごと

島取県 鈴木村颯子

農婦哀史それでも妻は笑ってる

なだらかな起伏砂丘に恋の花

しあわせのパロメーターか妻の髪

ひと針ひと針縫うて男を追いつめる

大阪市 江城修史

古傷に触れて桜は散り急ぐ

直角に曲る人生媚知らず

なめらかに煮つめた嘘のすばらしい

別れの譜心に友が消えてゆく

松江市 小林孤呂二

晩酌へ小さい愚痴など言うまじき

ゆっくりりとまわる地球で生きておれ

四つに組む男冥利の靴が鳴り
喰うだけあればと妻の小さい欲

大阪府 天正千梢

Xの人生五十年のかりたまり
安らぎは無信条に生きている

柄にもないと深呼吸へ目をとじる

夫や子に囲まれ何が淋しき

島根県 藤井明朗

ゆっくりと歩こう老いをなせいそぐ

人の世話もほどほどに世も変る

買い占めは無人島まで狙い

(寿大学川柳講座講師として)

寿大学川柳の先生とは面映ゆい

和歌山市 垂井葵水

尼氏句碑除幕に参加

海猫の舞いへ灯台指揮をとる

海猫の親子違った方へ飛ぶ

海猫の翔つとき潮に影落とす

海猫の帰路は夕陽をぶら下げて

倉敷市 小幡里風

白無垢の君バラ色に染める僕

何かある今日の隣の静かすぎ

身勝手なお人だったと石洗う

遠来の友が居留守へやってくる

倉敷市 小野克枝

正直な人間落す穴があり

同権を口に出さない割烹着

割り切っけていても隣りは優等生

信じ切るこのむつかしく尊きもの

倉敷市 野田素身郎

待合室がこんなに広いストの駅

告白のチャンス夜霧が深くなり

ひと息つけば水虫かゆくなり

連れはどこかでみつけるつもりの一入旅

米子市 八木千代

鈴振って神にノルマを押しつける

人妻の梓ほどほどのルージュひく

逢えたあとといっせ淋しい櫛となり

神話抱く岬へ夕陽まっしぐら

広島県 高橋鬼焼

灯を囲む岬に海女のわらべ唄

女心つかめぬままに旅をおえ

物価高妻のタクトをくるわせる

振りむいてあげようピンクの似合う人

岡山県 出原敬一

哀史収録マイクへ城の風薫る

細茎が支える百合の蝶重し

精失せし枯葉へ露の妊らず

屋根の石まくらに過疎の猫眠る

竹原市 森井菁居

みどり喰う毛虫の性をとがめまい

長男「信吾」一才

お節句の主役がはしゃぐママの膝

鯉のぼりほのぼのと見る肩車

そうかいそうかいへ一才のエゴ募る

富田林市 岩田美代

単帯私もゆるめる箸箸し

トマト色づいてピリオドまだ打てず

キャベツの値芯まできざむむひとり言

事なかれ主義のコーヒがほろ苦し

富田林市 木村弥栄子

夢のない男悪妻に作り上げ

明日あると云うまやかしへ目をさまし

うたがえば自分がみじめになるオモチャ

ジャングルにもけもの通る道があり

米子市 林瑞枝

嫁ぐ日近し両親へ茶の点前

鏡台へ今日の夢みる朝の顔

示談書へ十字架背負うたままの印

流転また才ある美女の不倅せ

大阪市 河井庸佑

物価高また遠ざかるマイホーム

ローンぐせついて何でも借りに行く

お互いに腹さぐっている沈黙

転落の齒どめとなっている友情

泉大津市 村上春巳

橋杭の岩をケンケンしてみたし

ファインダー妻をたたせる最南端

串本の海の広さで暮れてゆく

歓喜天子の無い夫婦ヒソと立ち

京都市 松川杜的

排気ガス知らぬお顔で毘沙門天 若狭湾を訪ねて

波頭の光りを追えば若狭富士

一波一波変わる砂紋を見て飽かず

旅情豊かにローカル線カーブする

岡山市 川端柳子

よるけても夫の矢印ありがたし

わだかまり一の疲れを十にする

なまじ傷包まず突かずそっと待ち

構図似たりよったり女同士の目

西宮市 藤村 女

母を思う心にいつもあやめさく

よく肥えているとうっかり嫁をほめ

うぶ声は秤の上で天を蹴り

散る花へ耳をすませば音があり

兵庫県 河原みのる

パン喰べて君カ代嫌う児が育ち

ザリガニの勇気を賞でて蹈みつけず

おそざくらよし寂光院たらずとも

日本陥没ざまみろという気もひそみ

東大阪市 宮西弥生

石垣の執念亀裂のまま耐える

飛び石に來てから女酔うたふり

焦点がきまらぬ女の無防備

女の友情妬心となつて牙見せる

守口市 村田瓢太

孫の片言を聞く楽しみもある電話

古い葉をはらえば若葉の活き活きと

静かだと覗けばニキビつぶしてた

招待に車椅子も交る通り抜け

大阪市 太田良子

美辞麗句並べただけの式終り

怒りかたまで似ているなと子を思い

発車ベル鳴っているのにまだ迷い

十代の娘親の目に余り

美禰市 安平次 弘道

黒揚羽毛虫の過去にふれさせず

レース編む根気仕事のものでなし

モーターのネオン不倫の色に燃え

コップ酒しずくも飲んで壮語る

守口市 羽原静歩

なるようにしかならぬ朝のペダル踏む

捨印の薄情朱肉が褪せている

塔高く聳え日曜のカメラアイ

敗者の拳が銀行のドアを押す

平田市 久家代仕男

精励恪勤ていよく妻に飼育され

桑の実が熟れ童心が甦えり

物置の隅から祖父の三度笠

雲走る鳶職の目に動くビル

松江市 舟木与根一

嫁ヶ島松江の夕陽ひとり占め

休耕田政治不在の草が伸び

貯えを土地に換算してさみし

入歯はずす妻をうっかり見てしまひ

神戸市 仲 どんたく

放尿の快 口笛を吹いている

又友の逝きぬ白木の黒い文字

スナップヘタレント母の肩も揉み

民宿の何は無くとも備前米

倉敷市 藤井春日

草枕ほんとに何処かへ逃げとなり

勲章の主はとくに風化して

無から有産みだす人生汚れてる

丹精を込めた一輪呉れと云い 娘の縁談

岩国市 弘津柳慶

血統を妻あくまでも主張する

掃除するのに吸殻を投げ捨てる

連休へせがむ子もなく寝て過し

日曜をこせこせとしてきらわれる

忙中に忙あり男同士の話

大阪市 児島 与呂志

当面の事でないので忘れとき

女の子だから無駄でも聞いてやる

持て余す時間もつたいなく持て余し

西宮市 島居 百酒

掛軸の運筆頭で真似てみる

燃えつづけ実らぬ恋が詩となり

燃える血があつて恍惚の人でなし

宅地なみ農地へ穀雨無駄に降り

八尾市 香川 酔々

火星人へ親展と書く封書

タイムトンネル

金星で待つと駅の伝言板

月の石置いて庭師が思案する

タイムトンネル出ると地球の波の音

大阪市 神谷 凡九郎

スケジュールが破裂しそうな旅に出る

見る位置をちよつとずらした面白味

人間をうたう詩心を掘って見る

自分に勝つなんて不遜な心抱く

大阪市 金井 文秋

博識に見えて本屋のもの知らず

ささやかな心のゆとり花作る

スランプも慢性特效薬がなく

ゴールデンウィーク遊ぶ人稼ぐ人

大阪市 宮尾 あいき

一人居の空虚を埋める花を活け

夜の部屋あやめの色が淋しすぎ

痛む目に夫の遺影もうれい顔

母の日

大東のカアネーションに母はてれ

大阪市 柳原 静香

因果応報子に若き日の我れを見る

孫を預かって

共稼ぎ母の日 母へ子を預け

三女結婚

嫁ぐ日も近く無口な父になり

嫁ぐ娘へまだまだ何か言い足らず

和歌山市 野村 太茂津

片言が通じた孫の瞳に和み

遺伝とや孫の反骨頼もしき

迫真の演技に見えて信じてず

割り切つて生きねば腹が立つばかり

鳥取県 森田 布堂

過去帳に同名がある大五郎

出雲路の神話も知らず飲んで酔い

アイデアはプラスチックの位牌の座

大山の色が変つた五月晴れ

松江市 柳楽 鶴丸

二ア人の愛が神なり仏なり

よくねむる妻薄情に見える日も
味の芸術を次々生む台所
すまんなあと妻へ素直に云えた幸

今治市 越智一水

夫に染まり染まって幸せかみしめる
信じ合うそこから愛がまたつのも
手を上げておはよう僕にある若さ
さばさばと生きようそんな気にもなり

松江市 恒松町紅

燈台の眺め緑に映える句碑
神と詩の出雲に句碑が一つふえ
うみ猫の乱舞へ今日の除幕式
公害も忘れいで湯の宿ゆかた

倉敷市 松下梁水

孫連れてもどれと故郷の花だより
五線譜の空は昔のまま澄み
工事場で梯子を借れば釘も呉れ
山里のここに亡母在り野菊咲く

大阪市 黒田真砂

心病む日は紅させど彩あせる
人の死をさかなにしてる縄のれん
お返しに又お返しが来る負担
核心は女心の機微にふれ

京都市 都倉求芽

月の白だんだん黄にして車窓暮れ

この青空に今日は洗濯ものがない
子のネジを巻くよに矢車廻ってる
ある期待心の鍵を外しかけ

大阪市 飛田好一

傷心の枕をぬらし夜半の雨
ひと言が足らぬ貧しさ義理を欠き
血走った眼の銀輪へしがみつき
連休もあと一日はもてあまし

大阪市 河股緑水

霧の中男と女ドラマめき
いつ来ても故郷は僕を抱いてくれ
村眠る二人を逢わずだけの月
母さんの頬ずりみたいな春の風

堺市 高橋千乃子

メーデーに五月の男冬の髪
春の風知らぬ造花でうすよこれ
いつわりの作り笑いの中休み
時のずれ親子のはかりゆれ動く

笠岡市 高木桃里

一本松枯れて故郷がまたうすれ
忍従に耐えた祖母なりデスマスク
今朝開く朝顔を待つ車椅子
社長には届かぬ意地を持って平

羽曳野市 大峠可動

人生の真ん中へ未完の譜をうめる

夕映えを背にして夫のそばにいる
償いになるか故郷を自慢する
人間の枯葉になつて土を恋う

出雲市 原 独 仙

医療費が無料の齡をわびしがり
人生を二度勝負する職を替え
よくお氣がつく方神経質とはいえず
結ばせてあとは二人でやれと神

尼崎市 高 津 徹 也

筆あれて若人に今壁があり
一つしかない止り木に生きている
止り木の細さを知つて夫婦和し
水平線夕日やすめる色となる

樞原市 岩 井 本 蔭 棒

喜こんでいいのか妻のバイタリテイ
工作の手先に大工を継ぐ素質
俗説を確かめてみる妻の耳
突然の悲鳴へ蛇も面くらひ

奈良市 宮 口 笛 生

何時命とられるとも知らぬ今日を生き
その次は人間様だよ P P M
病み切つた日本列島名医なし
すすまない顔へ承知の蠅止まる

大阪市 川 口 弘 生

倉敷の土蔵の雨に酒深し

釜鳴りの巫子は美人でなくて良し
末法のお寺らしくてよく栄え
融通無碍卵は精進の中に入れ

八尾市 飯 田 悦 郎

母の墓掃除のひととき母といふ
貫禄はないが五人の父である
天才にきらめく星が掴めない
振り向いただけの笑顔でそれっきり

島根県 小 砂 白 汀

曲げられぬ背景を重く重く負ひ
黄砂舞う宇宙 慟哭する日なり
想い出をたぐるに五月あかるすぎ
ブランコの墮性に任かすほかはなし

新宮市 大 矢 十 郎

選評へうなずいた目が匂へ戻り
お湯の出る暮しを妻が聞いてくる
楽書きの数字も今すぐ欲しい額
ふと乗つて見度いブランコ春うらら

三重県 川 上 大 輪

うぶ声に今人生の幕上る
妥協して男は次の策を練る
履歴書に余白の多い父であり
ただ歩くだけでもモデルと云う歩巾

富田林市 和 田 維 久 子

南九州の旅 (三句)

桜島煙の行方を追うて旅

九面鈴名もなつかしい霧島神宮

青島の風紋はるか波白し

羽ばたけば自由な羽も重くなり

岸和田市 葛城 伊三郎

家出した我が子に似てるモンタージュ

仁王さん忿怒の中にある慈眼

撞れて来た大阪の眼の睨まし

実のならぬ山吹なれど黄金色

倉敷市 竹内 翁 童

木もれ陽をふみ病葉の声を聞き

旧かなに出合い日本の心知る

することの無い日曜を早く起き

相談をしたばかりにまとまらず

竹原市 時 広 一 路

仮面脱がせた盃冷えてゆく

雲ゆるりゆるりまだ窓の半ばなり

棘の先円くしていた女です

それぞれの個性を埋めていて平和

松原市 玉 置 重 人

本心をはっきり知った夜の長さ

一線を越えあきらめの色走る

新幹線せわしい旅にしてしまい

同権の女いたわるのも男

枚方市 宮 川 珠 笑

惜しみなき娘の脚線へビルの春

とび乗った息の乱れとバス発車

干し終えた妻の機嫌へ五月晴

残飯を雀に任せ眠る犬

羽曳野市 塩 満 敏

とび込んだトイレ只今清掃中

春うらら車掌は駅名まちがえる

青い目の坊さんもいる京の寺

花見るになぜ酒がいる金がいる

堺市 伏 見 茂 美

二人して育てた愛のゆるる音

もう脱げというらし常着綻びる

逃えたように母の日母は旅

金出きたら付き合う人も変るらし

島根県 大 森 孝 華

突風の姿へ柳そうて舞い

春よ春女の業は寂しけれ

ふくろうの鳴けば寂しさ過去を繰り

水割の洋酒へ和むエネルギー

東京都 増 田 次 章

仲の良さそのなれそめを聞きたがり

帰る家あるから楽し旅の宿

万緑の一つ一つにある生命

舗装路の花壇養女のように咲き

八尾市 大 路 美 幸

思い切り飲んで唄った虚ろな夜

善人の大声今夜は酔うたはる

激論の隅で徳利はジューと待ち

馬鹿になれ馬鹿になるなとコップ酒

島根県 中島英子

霧の海動いてシャッター切りそこね

無くてすむ老いの気楽さうらやまれ

医療費の免除気楽に足運ぶ

欠点も時効となつて共白髪

松江市 岡崎祥月

心の扉開ける妻の手あたたかし

方言に故郷の味ふるさとの詩の道

老いたのしさだめの道を二人ゆく

笠岡市 木山遠二

七十五回誕生日

日の丸を揚げたいような日本晴

高野山

寂として光秀も信長も居る高野

耳鳴りの他 音も無し高野の夜

名古屋市 吉田水車

温室でハイビスカスの色っぱさ

旅疲れの果てはローンが待っており

文 楽

人間より人間らしい息つかい

愛媛県 渡辺曉童

日本一の句で祝いたや初轍 外孫啓司轍

それぞれに好みのとこへ年を寄せ

日本語で言いよいものにおめでとう

大阪市 木村水洞

伯耆富士から山陰の旅になり

生活に余裕が出来た糸を垂れ

買占めも出来ぬ長屋の喧しさ

伊丹市 小川静観堂

三歳の反抗可愛いくてかわいくて

部隊長がようつとまった独り言

ウチのお茶亡妻と二人で試めす今朝

愛媛県 村上旭童

応接間誰をお通しする農家

ちと口の過る妻なりはたらきて

伝統の重みまっすぐ歩かされ

広島市 山田季賛

野山春車窓はうらら風かおる

雑談もコーヒも仕事午後三時

前向きに話せば足を引っぱられ

岡山県 池田古心

田作りの城護つても閑がなし

嫁の愚痴姑の憎しみみな背負い

放任主義親馬鹿にされ馬鹿にされ

鳥取県 清水一保

連休も済んで若葉が目映り
子心に教育ママだと思ひ

五月雨に和する蛙が居て静か

大田市 藤田 軒太楼

気を楽にもてとは無理な手術前

田作りの腰をのばせば鯉のぼり

計算器の不慣ソロバンで確かめる

兵庫県 遠山 可住

老人会長最後の肩書までもらい

三角の土地あり三角に家を見て

宝塚他所の植木の中に住み

宇部市 平田 実男

結婚十五周年を迎えて(二句)

子等からのお祝い値段の倍嬉れし

年輪のようにだんだん太る妻

釣糸がしばし邪心を捨てて呉れ

堺市 藤井 一二三

名が売れて貯めてコンピに溝ができ

ハイミスへ聞えよがしに猫の恋

執念に似てひまわりの陽を慕ひ

倉敷市 谷井 扇水

感触は古里じやないアスファルト

気楽さをこよなき主義として太り

野次馬の好意は血相だけ交える

大阪市 宝谷 徹舟

文化財みたいな声で紙芝居

街頭の将棋へ出かかる手を押え

地虫鳴くみたいに耳が鳴り始め

倉敷市 能登原 白水

一言の愛が扉を開かせる

忍従の母が私の胸を射る

満ち潮にカニ万歳をくりかえす

呉市 楨田 英詩

今日こそはと凡人門を一步出る

お地藏にあやかりたいよ忙しさ

渡り鳥の触角に初夏探られる

生駒市 草深 醉升

威勢よく我が家も揚げた鯉のぼり

チャンピオン判定勝でもの足らず

明日と言う夜もありこらで本を閉じ

大阪市 今西 章雅

双葉にしてかんばしくあれ孫生る

以下同文と弔電一通だけ読まれ

金もうけ下手で人後へついて行き

小松市 馬場 魚山

嫁にきて五年堂々たるいびき

借金が返せないからそっぽ向き

竹の子も一枚一枚脱いで春

責を負う意見は威勢よく出せず
香川県 岡田 拳法

たてまえで押し損得ではたきこみ
ヒロインのつもりかヒスに浸ってる

笠岡市 松本忠三

春斗が煮えないままに目に青葉

目を閉じた中に邪念が駆けめぐり

鏡台にもう関心の孫娘

姫路市 大江秋月

水車一緒にカメラへ仲間入り

袖たてかえれば神様嬉しそう

商人が暮らしをかけて五ツ玉

岡山県 横山一声

四代目と云う肩書の荷が重い

御馳走様してから女菓子も食べ

手術すむまで沈黙の長いこと

倉吉市 渡辺菅句

説教をする柄でないので笑い

指環はめさせていて能面でいる

熱帯魚のような服着てひとりいる

東大阪市 竹中肖二

買い貯めの品が倉庫でアクビする

救急車ひとときわ響く昼さがり

日給の身に休日が多過ぎる

東大阪市 竹中綾女

渡し船まだ生きている瀬の村

長谷寺にて

カメラアイ牡丹の中の牡丹撰る

大東市 土岐トク子

T・Tとイニシアル母の日プレゼント

赤みどり寝袋二ツハネムーン

五人目にやっとなげたぞ鯉幟

大阪市 西川誓二

光明遍照地球一ぱい陽の恵み

皆の舌にようやく馴染んだ嫁の味

向けられたマイクへヒーローぎごちない

鳥取県 谷無閑

或る日フト聖書を読めば意に反し

L寸を着る子に希望のミシン踏む

目に青葉山菜匂うにぎり飯

東大阪市 斉藤三十四

原点では了解済みが採めている

御高説チヨクチヨク痛いとこに触れ

ベレー帽欲に縁ない顔でくる

諫早市 原田明春

実家からの智恵づけがあり妻勝気

管理職手玉に取って出世せず

ジグザグへお巡りさんも笛を吹き

大阪市 神田秀峰

せまり来る奇岩断崖海昇る

瀬にて

現代の娘は伝家の宝刀抜きたがる

ヨロメキを覗てから妻はよく粧し
強いもの地震・雷・火事・女

大阪市 藤田 頂留子

行楽のしわよせ商店街のぐち

当麻寺参詣

姫の肌中将餅という商魂

串かつの客

飲み食いの分業にして親子づれ

八尾市 古川 鶴声

水鏡しても矢張り猿は猿

信仰は我慾に生きる人間像

若本 多久志

続、会長就任

余命いくばくゆっくりズムでゆかかん哉

燃え残る情熱とくと消さばやな

早まったとはよそ様のお世辞なり

キッチリと折目をつけた人生観

新しく生きる余生へネジを巻く

北川 春 巢

贅沢は連休疲れなどとい

膝ぼしを気にしつツミニベダル踏む

土地成金新聞に出た慌てよう

武田薬品・薬草園見学(五、一一)

三本と同種の薬木なし 緑
コーヒーの木を見たことも話題なり

川村 好郎

芽吹くものことごと弾み細る肩

夕焼けの消えて未完の道下る

老木のいま沈黙を守るのみ

感謝あるのみと老いの微笑み

七十には七十の夢淡い虹

西尾 栞

ドルメンに空想の雲 動くなく

城あとの石に座れば影孤独

集合の笛をきびしく吹く樹蔭

島の灯を指さす肩は抱きよし

国引きの神話のいともおおらけく

菊 澤 小松園

誘われて男火中の栗ひろう

棘のないバラで反って手が出せず

蠟燭のもいちど燃える風を待ち

崩れ落ちても牡丹の美しさ

堪えている風船だから皺が無い

▼西尾栞副主幹の母堂タミエさん(八九歳)が六月二十日

朝急逝されました。六月二十二日八尾の自宅で盛大に告

別式。謹悼。

川俣柳 初篇研究

(百二十)

前田喜代人 川端柳風
 故
 岡崎重義 高須啞三味
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田甫

702 けしからぬ廉葉つまそふにせなあ吾

菅江

川端「けしからぬ」はすこぶるの意。廉葉は手刻み煙草のこと。せなあは、家兄または男、近世は東國の田舎の方語として使われ、ここでは単に田舎者でよいと思う。主題句は田舎者がうまそうに安煙草をのんでいる。

高須「けしからぬ」は、ほめられない、宜しくない、感心できない、あやしい、異ような、よくない、悪い、不都合な、不当な、はなはだしい、すごい等々十以上の意がある。廉葉は安煙草という礎解通り粗悪な煙草に賛成する。

煙草をばウンとねじ込み下戸野がけ
 三三・32
 で、煙草好きはあまり品質は気にせぬものである。

岡崎「いかかわしい安煙草をせなあがうまそうに呑んでいる。煙草といえるかどうか

あやしいしろものだが、せなあは結構、国分でものんでいる気持ちだろう。

前田「前説に賛。今日ではさしあたり、未成年のチンピラアンチャンが短くなつた煙草をふかしているといったところ。

藤井「岡崎説に賛。「けしからぬ」はいかがわしい、まやかしのもの意。戦時中、私たちはもろこしの毛などけしからぬ煙草を吸つたものだ。粗葉は粗葉でも最下等の品で、煙だけがタバコらしいしろもの。

丸「諸説賛。
 岡田「同。但し礎稿の「せなあ」の説明、単なる田舎者でなく、それが青年または壮年の男である。田舎者でも老人をセナアとは云わない。

703 氣をとり直しく嫁はらみ

青口

川端「亭主の浮気を今度だけは今度だけはと我慢しているうちに子供ができた。いさかいをしいしい腹を大きくし

因果立てしいく内儀孕むなり 四・17

高須「氣をとり直し」がどうも「亭主の浮気を我慢」の感じではなく「自分の気持ちを立て直し」の感じの方が強いので「まだまだ子供を持ちたくない」という気持ちをもちながら、ではないか。引用の二句もひつきようその方ではないか。

岡崎「まだまだ子供はもちたくない——というのは当世の感覚で、当時は違うのではないか。礎稿に賛。

清「吉原通いの亭主に愛想をつかしながらも、今に遊ばなくなるだろうと松ヶ岡へも行かずに」。

藤井「高須説の子供が欲しくないのではなく、亭主の道楽にこりて氣をとり直してきつぱりと縁を切りたいと思いつつ、夜ともなれば雪夫人のように心理がついに離れられない。即ち別れよう別れようとしながら「首をふりふり子をふやす畑の暮」の類。「首を弱さを云つた佳句。氣をとり直しとり

直しがよくきいてゐる。

丸二礎稿賛。

岡田二礎稿と藤井氏説に賛。

704 比丘尼でも買ふよふに出す百旦那

一 甫

川端二比丘尼は私娼のこと。寺へ百文包んできたのを、比丘尼の枕代百文に見立てただけの句。

高須二百旦那とは、寺へ百文ぐらいしか布施を包まぬ安旦那のことだから、すべて安直。

ロウソクに似たものを出す百旦那 一四
で、安インバイでも買うように百文出したのである。だからといって和尚様の方は、百旦那まさか衣も略されず 六

である。但しお経の方はぐっと簡略に数分で切りあげる。

百旦那へは豆太鼓くばるなり

傍三

前田二ケチな旦那の見本。

清二百文と百旦那という金額も関係あるだろうが、比丘尼が本来尼僧であることから寺と尼僧をも掛けているのではないか。

丸二清説賛。比丘尼の枕価は切二百、下は百文。

岡田二同。坊主と比丘尼との取り合わせ。

705 宿おもひ下女替り味噌などもらい

門 柳

川端二「宿」は江戸時代「下女が宿」と称して奉公先に対して親元となる下女の請宿があった。句意は下女が変味した味噌をも

らって、宿へ帰ることもあったであろうという軽い推測。

高須二「宿おもひは宿思いで、親思い、兄弟思いなどと同じに「請宿大事に」である。だから「かわりミソ」も「変味しかけたミソ」ではなく、何かもらったミソ（袖ミソとかソバミソとか）あまり町家でよる

こんで食わぬミソを「お前持ってお行き」ぐらいで、もらって行った——のではないか。

岡崎二下女は「替り味噌」を誰にももらったか。「宿おもひ」の語辞から雇われ先きから貰って、請宿に手土産にしたようだから礎稿賛。

前田二意は諸説に賛だが、「替り味噌」がはっきりしない。

清二句解は礎稿に賛。但し「替り味噌」は変味した味噌ではなく、珍らしい味噌であろう。

藤井二家々の味噌は家風のようにそれぞれ特徴があった。秘伝めいた味噌の味、その味を一味知らせようと、主人に頼んでもった宿主思いの下女。替り味噌とは、店屋で売っていない独特の味噌のこと。真実味のある佳句。

丸二「宿おもひ」の宿を請宿と解しているが、小生は実家と解している。

おきやがれ宿下り宿をきたながり

下女が宿前出し地蔵近所なり

一九ス・11
末四・9

の宿も同様である。したがって、実家思いの下女のいじらしい心に主家でも何かにつけて面倒を見てやる。——変味した味噌などもらって、ついでの時実家に届けてやる下女。

岡田二丸先生の説の通り。

卍 卍

川端二涼み船。屋形船は多勢の船頭が屋根の上にのぼり長い棹で漕ぐ。

船頭を屋根へ上げたるおもしろさ
船頭の足音を聞くいい涼み 二三・13
天気にくぐまれた涼み船。芸者同伴の豪勢なあそび。

高須二「いい涼み」とは、豪華な納涼ということで、礎解の如く屋形船で納涼とシヤレこんだ御大尽の句。

岡崎二「屋根でかけっくら」は棹を押しながら屋根の上を行き来する船頭を威勢よく比喩したのだろう。

丸・岡田二賛。

▼直原玉青先生指導の第12回青玲社余技日本画展は6月12日〜17日まで阪急百貨店7階で開催。生々庵主幹ご夫妻も出品され連日盛況だった。

▼第九回埼玉川柳大会は七月二十九日開催。投句締切は七月十五日、詳細は左記へー

▼336 埼玉県浦和市常盤九
—十四—六。武藤かめ吉方へ。

白狐と川柳連

東野大八

この三月姫の結婚式があり忙中余儀なく郷里伊予大洲へと足を向けた。毎年帰郷は夏ばかりのことで、エヒメ川柳大会に参加することが、来る年々の恒例となっている。それだけに、こんな数年ぶりの春の帰郷は思わぬ余慶におつかるもので、かつて終戦直後に、家内と生れたばかりの長女を抱えて転り込んだ思い出の家の前に立つ機会に恵れた。けれど二十六年ぶりのことになる。

その家は京作りの小さな隠居用の一つ家で狭い袋露次のつき当りであった。当時、私へそぐらいほどの柿の木が門口にひよろりとしていたのが、今は亭々たる大樹に成長し花のような若葉を枝一面につけ、誇らしげに私を見下ろしていた。

往時、夏になるときまっけが氾濫し、この辺一帯は一面の泥海の洗礼をうける。おかげで置のない家が多く、ほとんどが板の間か、薄べりの生活であった。私の家もねだ板だらけのガタビシづくめで、わずかに一部屋だけにゴザを敷いての暮らして、夏と秋口はげげじとこおろぎが沢山遊びに現れる。困るのは冬で、湿った夜風がねだ板の底から吹

きあげる完全冷房の徹底ぶり。

露次の入口はコンニャク屋で、よく不揃いなこんにゃく屑の口裾分けにあずかった。しみまにはそのべろべろの煮つけが出る、またこいつか、としんからうんざりした。若い癖にトイレが近いのは、ねだ板の風と砂を下ろしすぎた道具のせいだとよくこぼした。

敗戦直後のセチ辛い世間で、隻手の引揚者で妻子連れのルンペン生活、味気ないのを通り越してやけにアッケラカンとしたどん底生活の唯一の楽しみは、表通りの一見洋風の古びた歯科医院の建てつけにあった。

「おじさん、先生が呼んでるよ」

とこどもの使いがくると、私は小膝を打っていそいそでかけるのである。その入歯だらけの技工室をのぞくと、既に二、三人の顔が固唾をのんで控えている。さあ、お待たせした、はじめるべえ、と白い上っ張りのチョビ髭の先生がやおら取出したのは日本薬局製の精製アルコールの重い営業用の青びん。ラムネもすでにそろっている。かくて青びんの中味と泡立つそのカクテルによるひるひるの酒盛がはじまった。話はすべ川柳である。

このころ水郷に柳社というのがあり、その本部がほかならぬこの今川歯科医院。先生を掠影といい、この吟社の総帥である。本誌でおなじみの米沢曉明さんも仲間のお一人だ。粒のそろったベテランぞろいで挙って「川柳雑誌」の常連寄稿家だった。戦前、この水郷川柳社で麻生路郎先生を迎えて一大川柳大会を催した。その際の先生の作

——この鮎も藤樹先生のたべた鮎 路郎
が色紙に揮毫されたのが屏風になっている。中江藤樹は朱子学の鼻祖、大洲城趾にその銅像がある郷里の偉人だ。

さて、このような生活の中に、忽然として妙な人物が登場した。私の住むとなり露次の中に店を張る小料理店村雨という飲み屋の主人で、自称「白狐の三次」彼との出会いにはコンニャク屋の息子と小バクチの仲間だったらしく、ツーカーの飲み打つ買うの悪童連れである。コンニャク屋のどうせふれ込みだらうが、この三次くんひどく私を信用して、そこへくるたびに私のところに寄っていく。年齢は三十二、三か、色の白い小肥りなちよいとした角刈りのイナセ風。見たことはないが身体

のどこかにキツネの彫りものがある由。ある日、折入ったの頼みがありますがちよいと顔を、と酒一本をさげてきた。酒にはヨワイルンペンの当方、酒を横目に話をきけばこうだ。この彼がとなりの町で彼女をこさえ、七年連れそった女房を追い出して後釜に据えた。ところがその女の親がひどいのんだくれでたびたび無心にくる。はじめは気前よ

く小金を出していた彼もついにしびれを切らして女の賛成を得て、もう二度と来ないようなチをうつことになった。ははん、さてはその助っ人だと感じて「おみかけ通りのこんな身体だ、イザとなりやケンカにならぬ」と酒は惜しいがそういって断わった。ところがその相手、万事私一人で仕切るから、傍らに坐っていて貰えばそれで結構ですと、ペコペコ頭を下げての頼み込みでとうとう私もイヤとはいえなくなつた。あつてみるとそのウルサイ親爺、のんだくれの極道の例にもれず、頭は鈍いかなりしつこそうな四十男。チンピラやくざの底意をみせた彼の言い回しと、私の顔に免じてどうやら納得したらしく、もうこれっ切りという金千円を受取つた。そのかえりぎわにその親爺

「どこのお方か知りやせんが、大陸渡世の義理ずくで、片手落して俠気たてた立派な親分、思えば惜しい片身でござんしたなあ」と芝居のセリフもどきに言つたのにはいかな私

も愕いた。「いやあ、これは失礼とにかくそうでもないわにや引込む相手じゃあねえ。実は大分奴さんに先生のことを吹いときましたねえ」と頭をかいた。ルンペン八カ月、隻手の身体に栄養不足が加わり、風呂場の鏡でみる私の面はわれながら迫力に富んでいる。憤然とした私の顔に問題の彼の若い後添えは、思わず丸っこい膝をこわばらせて一メートルばかり

も後ずさつたことでも知れた。

ノンベでケンカ早く、店が暇なのにまかせ折ある毎の賭場、こんな亭主に村雨は流行るはずはない。いっそコップ酒の大衆酒場にしろ、とすすめても彼は彼の面子がある。しかも、客の来ぬ水商売とあつてはどうかにもならぬ。彼は一挙に途方もない大バクチに出た。彼は表通りのとある一軒の店先を借り受け射的屋を開業した。射的屋といつても遊廓の人影落しの鉄砲屋という月並なものではない。パドミントンの羽根みたいなのに針をつけ、それに固定した台上で回転する文字盤に鉄砲で発射する仕組みのものだ。今でいう宝くじの抽せん様式とそっくりのものと思えばよい。しかもそれは資金の都合で一台式だ。ところがその初日の店開きに狩り出された

のが外ならぬわが水郷川柳社の御連中だ。何さま景気づけに一役買つて頂ければ、夜は開店披露に一席設ける約束だから、いま思えば他愛のないものだった。ゾロゾロとてんでに亭主から百円ずつの金をもたされさも面白そうに交替でぶっ放してみせるのである。だが、入れかわるたびに胴元の白狐の親分が、秋祭りの見世物小屋の呼び込みながらの派手に、みんなへき易して一回きりやめてしまった。それはとにかくその夜の村雨亭の一大パーティーは実にけんらん豪華そのものであつた。久方ぶりの銘酒の味はラムネアルコールの比ではない。さもしやぶつ倒れ

て朝帰りというのもたしか三人はいたはず。しかし、かんじんの矢場はたつた二日で潰れてしまった。藤樹先生の城下町では流行る道理はないと、われら一同無責任な批判を交しあつたころ、村雨の主人夫妻は忽然と姿を消し、料亭村雨も同時に消滅した。白狐と異名をとるだけ、その神速ぶりは絶妙だつた。かくて十年後、私は偶然に高松棧橋で、おへんろ姿の白狐夫婦にあつた。懐旧いとそぞろの中で、私は女房の顔がちがつていることに気づいた。後添いは逃亡。捨てた以前の女房とよりを戻した白狐の親分というわけだ。「今はお大師さまのみくじを細々二人で売つて食つてます。今にまた巻返えしますよ」そう強がりをいっている白狐の頭は白髪がいっぱいだったが、仇名通りの銀毛とはとてもじやないが受取れなかつた。



金露

味の支えを清酒

キンロ

金露酒造株式会社

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四八年二月号
至 四八年五月号

路郎賞候補作品

北川 春 巢

実動十日の農機を借りて買い
途中下車出来ぬ話に乗せられる
甲斐性ない親に似て来て叱られる
もう一升空いたかそうかお元日
出動簿わたしを殺す判を捺す
父と母と坐った位置に妻と居り
べっぴんの婦警違反へ容赦せず
都合よく事だけ聞くと長寿法
真白く干して女は満ち足れり
酒の味ちびちびかんで一人旅

久家代仕男
時広 一路
金井文秋
宮口 笛生
高杉 鬼遊
高木 桃里
室谷 徹舟
堀江 正朗
小野 克枝
高橋 鬼焼

西 尾 葉

暑さ寒さに我慢いらぬ世を嘆き
辞退した椅子へライバル来て座り

天正千梢
小幡里風

婦人記者身につまされる過去があり

ゆっくりとこはせ止めている迷い
沈丁花の香りの中の立話し
間に合わぬのが親方の肩をもち
バイブルに手に乗せてより愛重し
山頭火おれにも同じ想の詩
正義感までそっくりという通信簿

高橋操子
岩田美代
藤村メ女
村上旭童
小浜牧人
吉岡通児

ブーメランそんな夫にあきたらず
ぶっつける斗志へ山は慌てない
邪魔になる母の躰を聞く安堵
逆転のない人生の銀を振る

斉藤三十四
竹中綾女
板尾岳人
宮西弥生
高橋鬼焼

若本 多久志

有終の美を柿の実燃えて居り
風ふけば落葉は舞うてみたくなり
人の世の汚れた人へ雪は降る
人間を支えたルール古しという
生涯をしるダイヤを軽くうけ

清水一保
河内天笑
工藤甲吉
尼緑之助
高橋千万里

川村 好 郎

ほこりたてまい心の歩道そつと行く
散ることの出来ぬ造花を拭いてやり
おんな 妻 自問自答の白い壁
出動簿わたしを殺す判を捺す
バイブルに手に乗せてより愛重し

本田恵二朗
宮西弥生
小野克枝
高杉鬼遊
小浜牧人

着崩れて女 おんなの夢を追う
滔々と心に流れる河を持ち
自信また崩れて積んで凡夫なり
たくらみのない牛の瞳の澄みきつて
燃えきつてからも女はバラを抱き
夢で会う亡夫はあつちむいたまま
紫煙ゆらゆらとジレンマだけつものり
真白く干して女は満ち足れり
柴煙ゆらゆらとジレンマだけつものり
森井菁居
小野克枝
宮尾あいき
江城修史
鈴木村諷子

真実を求めて渡り鳥は立ち
神さまが作った涙が流さんか 不二田一三夫
片目の達磨いつも心の隅に抱く 小出智子
三角の底で女は行詰り 木村弥栄子
あてのなく喪服眠ったまがよし 川端柳子

菊 沢 小松園

焼いもを頬張る口紅とは見えす 吉岡通児
その女もう挨拶も他人めき 河内天笑
ふところ手金に困つてるとは見えす 傍島静馬

向うでも受話器を包む深い仲 大矢十郎
半分に割って小さい方を取る 正本水客
押えれば愛は炎となる定め 石川侃流洞
お手植の松とは松喰虫知らず 横山一声
結婚しました自然点火です 柳葉鶴丸
揚つても揚つても雲雀に空がある 小浜牧人
真実を拾い合つて夫婦という楽譜 大峠可動

正 本 水 客

まだまだまだ頭でわかつただけのこと
あれやこれ地酒を給う冬の旅 戸田古方
こんな時救われる夫の無関心 三井酔夢
世界地図 日本は力んでるみたい 河野君子
華やかさみんなさらつて嫁にゆき 谷垣史好
引き金を引く指 神は給わらず 堀江正朗
ワッハッハと笑いとばして死なん哉 小砂白汀

若本多久志
本多柳志
柳葉鶴丸
竹中綾女
高橋千万里
不二田一三夫

「夫婦善哉」でも蝶々後家になり
早よ行かな上りまっせと交通社
結婚しました自然点火です
ブーメラソんなん夫にあきたらず
じうたんのよごれへ春はもうそこに

川柳塔賞候補作品

大 坂 形 水

山頂に住み残照を一人じめ 岸本豊平次
ばかばかうきうき野路をぶらぶらり 内藤ますゑ
日本の楽器の一つ大太鼓 秋月宏方
おでん食う愚凡の顔をあからさま 谷のぶお
目の合つた捨て犬必死に追ってくる 林 露杖

人と馬うなずき合つて過疎の坂
トランプで占う土曜甘い罨 野呂杜月
ピンが落ちている女の部屋に居る 小谷葉子
十字架の下にも赤い実が一つ 山根白星
花冷えに足袋の白さが痛いほど 逸見灯竿
柳原秀子
戸 田 古 方
うす墨の交わりなればさらさらと 今井松花

業ひとつ繕っている手術室 宮崎美津子
おたやんの器量見定め給を買う 安藤寿美子
正月の凧はにっこり舞い上り 平井露芳
家計ピンチせめてやさしい語を採す 嘉数千代香

嫁がせてはっくり日暮れの台所 堀江芳子
細雪心のかよう人に降り 小谷葉子
あやつりの糸をそおつとはなして見 梶 みどり

こと云うとこには効かぬ按摩椅子 森田カズエ
みんなあげると合い鍵がいう夜霧 阪上十止庵

橋 高 薫 風

めでためでたでひとり娘をもつてかれ 堀江芳子
新世界香車が一つ落ちていた 堀口欣一
本妻は金輪際の座に坐り 吹田三郎
サングラスかけてお寺の娘と見えす

冬の思想で重なり合つてる枯葉 秋月宏方
灯明を見つめる母になり給う 小谷葉子
背の君と妻に詠まれて撫然たり 三宅不朽
車椅子の男たくましき腕を持ち 山根白星
旅人へ旅人が道問う蟻峨野 柳原静香
何故かよく腹の立つ日で日が暮れず 麻野幽玄
安藤寿美子
限界を知って女でよかつたわ 日高文子

川柳 中山道六十九次 (6) 富士野鞍馬

30 塩尻

下諏訪から三里(一一・八キロ)
塩尻峠より西は松本領なり。此所より四里あり、松平丹波守侯六万石。信州にて山間広き平原の地なり。此辺の水はみな越後の方へ流る。又松本より仁科を通過して越中へ行道あり。阿礼神社宿脇にあり。

塩尻峠は、下諏訪との間、塩尻より二里登る。嶺より諏訪湖を遙かに見えて絶景なり。峠の東側に大岩高二丈巾二間があり、挿絵に描かれ「月千里はるかに富士と諏訪の湖」離島の句が添えられてある。

天文十七年(一五四八)七月十九日、此所で諏訪、小笠原の信州勢と武田晴信の甲州勢と戦い、信州勢は敗れて松本に退き、更に北信へ逃げた。それで松本平の大半は武田氏の手へ歸した。

塩尻で辛き目にあふ諏訪の勢 (新樽二六)

31 洗馬

塩尻より一里三十町(七・二キロ)
駅の東に養仲馬洗水という清水があるので

此所を「洗馬」(せば)という。
塩尻との間に桔梗原という広野がある。むかし信玄の先鋒甘利左衛門と、松本の城主小笠原氏と合戦があった。此時信玄方勝軍さといふ。

32 本山

洗馬から近く三十町(三・三キロ)
駅の西口に本山観音堂、信州巡礼札所二十番がある。

33 熱川

本山から二里(七・九キロ)いにしへここに温泉あり、故に熱川(にえがわ)と名づく。東山道駅次。此所より東を松本領とす。西は木曾谷の間みな尾州侯の御領なり。当駅中東西四町余、相對して巷をなす。最殷阜たり。其餘の民居散在す。

駅の東に桜沢橋があり、木曾、伊奈の分界なり、長さ十二間、西の方六間尾州侯より修造す、東六間松本侯より修造す。
挿絵に獣皮の見世が描かれ、それに「木曾

路は獣類の皮を商ふ店多し、別して熱川より本山までの間多し。又往来の人に熊胆(くまのい)をうらんとて勤る者多し、油断すべからず」と書添えてある。

雪の日に月の輪ががす木曾の山 (巻九(七四二))

一月の輪は熊
売ける胆は山家の猿の智恵

熊の威を借りる木曾路の猿の肝 (泉館(四六三))
柴川(四一六)

と川柳にもよまれ、熊胆というが猿の肝だった。

34 奈良井

熱川より一里半(五・九キロ)又橋井とも書す。駅中東西七町余、相對して巷をなす、其余民家散在す。此宿繁昌の地にして、木曾駅中の甲たり。檢細工が名産で、
檢を曲げて利にする木曾の木具細工 (野萩(〇九六))

木曾というのは、木曾川溪谷と犀川上流の奈良井溪谷、奈川溪谷とより成る地域で、西筑摩郡一帯をいい、東と西は木曾山脈と乗鞍山脈とが連り聳えて、南北二十三里(六七・

四キロ)に亘る狭長な山谷である。幕府の直轄地であったが、元和元年(一六一五)に尾州侯の領地となった。

木曾山の松は松のおすそ分け

早牛(九六二)

—松は徳川本家

木曾の山糸の清水で谷を縫ひ

三箱(一三四一)

仮小屋も松造りの木曾山

左棟(二六二)

虫へんに文ともいはぬ木曾の夏

茂柳(二二八)

—蚊はいない

蓮の葉に事かく木曾の魂祭り

要宣(八六七)

落葉して小家を見出す木曾の奥

木知(二五一)

—森林

木曾の山むかし朝日の出たところ

(明四義6)

—義仲朝日將軍

35 藪原

奈良井から一里半(五・九キロ) 駅中南北五町ばかり、相對して巷をなす。其余山間に散在す。

名造お六櫓。宮越、藪原、奈良井等に此店多し。そもそも此お六櫓は、木曾山中の名造にして、山間に田圃少なければ、多く諸品を製造し、これを売りに業とす。特に近年お六櫓と名して諸州に商ふ。木は棟梁(むねはり)といふを製す。と図会にあり、このお六櫓は

享和(一八〇二)の頃、妻籠(つまこ)宿

のお六という女が、脳の病を患って、御嶽山に願をかけたところ「みねばりの木もて櫓を作り朝に夕に黒髪梳らば日ならずして必ず癒えん」とのお告げを受けて、質の緻密なミネバリの木を以て、創めて製つたのが起源であると伝えられている。

それが街道往来の旅人によく売られたので、妻籠一村はこぞこれ製出したが、材料不足して、遠く藪原宿附近に求めたところ、いつしかその製造が、藪原、奈良井宿の辺に移つて、その販路は益々広まり、其後塗櫓が考案されて、精巧な蒔絵を施したものなどが出来た。此櫓は木曾名産として随分広く流行したもので、文化四年(一八〇七)には、江戸の山東京伝は「於六櫓木曾仇討」という草双紙合巻を作っている。従つて川柳にも多く詠まれている。

木曾山へさしこむ月もお六形

成安(二〇四)

木曾ほどに峰を並べるお六櫓

いづみ(二二)

木曾山は熊よりお六名が高し

其誠(四八)

木曾山のお六通りのお六

斗丸(四九)

山家育ちでもお六は垢がぬけ

三松(五七)

垢ぬけた木曾山の通りもの

乙(四三)

貫差を抜かせる木曾のお六櫓

風松(二〇八)

—貫差、錢貫文をサシに差貫いたもの

簪にかける

木曾日記女房お六に不審紙

三輔(二四三)

宿下り母のお六に香を残し

風松(二〇四)

鳥居峠は奈良井からの間にあり、坂險し、馬に乗がたき危き所なり。むかし木曾の御嶽の鳥居ここにありしより名とす、今はなし。ここに芭蕉の

雲雀よりうへにやすらふ峠かなの句碑がある。それを川柳は、雲雀とは鳥居の上で翁よみ

夢輔(二一六)

海月(一五七)

図会の挿絵には、御嶽遠景、義仲硯水が描かれてある。

下村梵個人川柳詩

武玉川 (第十二集)

執筆者の顔ぶれは柳界最高のもの。

—山頭火と私

—死について

—俳諧武玉川序文雜記

—昼寝のクスリ

—そこよろしく

—ほか好読みもの多し。

発行所 T950 新潟市船江町一丁目六

二、武玉川文芸社 下村梵

季刊(年四回発行) 送料共一十九年六百円

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

挟まれて暮すパターンに馴らされる

八木千代

この作家は川柳塔一月号に「いたわりの言葉にうるむ夜なべの灯」「育児法素直に姑を立ててくれ」と詠み、二月号には「子と嫁の幸へちよっぴり妬ける日も」と少し交ってきてそして「挟まれて暮す」と月日の経過と共に人間関係殊に家庭の和のありがたさとむっかしさが生れてくる。馴らされてこられたことはうれしい事だが、色々の問題に当りその中に如何に生くべきか、和を求むべきか、これからのご生活に期待したい。複雑な心理を巧みに表現していられる。

閉坑の飯場に残る裸球

高木桃里

時事吟はとかく報告川柳になり勝ちであるが、この句はそこを脱して閉坑を去ってゆく人々の哀れさをよく出しているし、裸球によって飯場の寂寥が目立つ。

ぜんまいを巻いても芯が弱ってる

傍島静馬

老いてゆくにつれて身心の衰えを感じる句は多いが流石凡句にならず静馬調にユーモアを含ませてまとめ上げている。

温い言葉探している別れ

小野克枝

余り技巧加えず、さらりと詠んでいられるところに味があり、作者のお人柄もよく出ている。あと味の悪い別れ方はどんな場合でも避けたい。会者常離とは云え、いつ又再会せんともわからない。此の世とお別れする時も怨みや愚痴を云わず、温い言葉でさよならしたもののである。ここまで考えるのは少し思い過ぎか。

雨だから歩く気になる御堂筋

若柳潮花

いつの句を拝見しても情緒でんめん、凡そ私と正反対の句をうらやましく思う。そうならこそ私の心を打つのであろう。雨降りの御堂筋、それも土砂降りの男一人なら歩く気は決してしない。しとしと降る中男の方が少し肩を濡らしながら夕暮の御堂筋を歩いてゆくのでしよう。

日稼ぎに無駄な紙面の株価欄

久家代仕男

朝刊だけでも二十数頁ある新聞のどの欄に

同人総会と二賞発表句会は
10月7日(日)午後二時~九時

長い時を掛けて読むかで大体その人の境遇教養などもわかると思う。職業案内欄を一字洩らさず読み探す人もあろう。皮肉な句で色々のことを想像させる。

抱いている秘密に女みたされる

木村弥栄子

進境めざましい作家の一人である。女性ならこそこんな句が詠め、男性から見ればそんなものかなと思う程女性心理を穿っている他の四句も心理描写をうまく表現していると思うが、余り文字の使い方に技巧に走らぬよう素直さを忘れぬようにして欲しい。

上様でいいと領収書を貰い

松本忠三

世はまさに饕餮贈取賄の渦である。料亭の方も個人で飲んでくれるより、会社接待の方が勘定の心配が無いから、上様であろうが誰だろうがすぐ領収書をくれる。いや領収書をお渡ししようかと気をきかす。

養魚池時間が来れば餌がくる

菊沢小松園

句材と云い皮肉味、それに多分の省略をうまく使って含みのある句である。今更ながら流石流石と云いたい。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

俺もついに飾り鉦という顧問

阪上 十止庵

顧問にまつりあげられた、自嘲的述懐であるが飾り鉦ながら、会としてその人のネームバリューを尊重しているところが伺える。顧問と飾り鉦の比喩の面白さが大変効いている、川柳らしい川柳である。

女 母 今日ほどの面つけようか

白井 孝子

女、母と句読点をつけなければ、鑑賞がうされる。女として今日は、どの面をつけようか、又母としてどの顔で接しようかという句意であるが、最近よく仮面という言葉が使われるようになったが、この句の場合も仮面という言葉が伺える。最初女おやと読んだが、そうなれば女親と書かねばならないし句意が全然狭くなる。

すぐ眠る特技があった人氣もの

渡辺 伊津志

いらいらした当世に、随処に於て、又枕が

かわってもすぐ眠れる神経を特技と見たてたところが面白い、之が又特技があつてでなくて、あっただから、旅行帰りの車中の同行者間の言葉のやりとりがきこえるようで、人気の迷惑そうな態度まで想像されて面白い。

小山 悠泉

アイラインは、昔アイシャドウというたものと思う、眼蓋にいれるその人好みの色、青色、黒色、等。黒色は眼の小さい人が大きく見せる為に入れるラインである。句意は、はつきりしているが、その皮肉な見方が川柳である。

逆ろっているのも女恋のうち

小谷 葉子

抱いた子にたたかせている好きな人の現代版か。四句共、従来のロマンティックな句より現実化してきたようだが、心境の変化かな。

谷 の おお

集金という俗現実なことも、職業果報なればこそ、満開の桜の花の下を通って、三日見ぬまに散る花を充分満喫出来た喜びを、うまく詠まれている。花の下通ると言う言葉と集金の言葉がよくマッチしている。花に会い、花を賞ででは駄目である。この集金者は毎日出て歩く、ガス、水道、電気等の集金を詠ったものである。

ふるさととは山までどっかへいつちやった

安藤 藤 寿美子

山までで、親類、知人も居らなくなった、

ふるさととの淋しさをうまく表現して、尚今度は開発という名のもとに、山まで削りとりちゃってゆく姿を見て、山もまたどっかへいつちやったとおどけた表現ながら言外にやけきみなところが伺える。

過疎になった、ふるさと、父母の匂いのするふるさと、自然のそこなわれていくふるさと、川柳は他の文芸のように、余り深刻に力まないが、こういふふうに訴えるところに川柳の良さがあり親しきがある。

小姑にほめられながら出す料理
栗和田 清子
尻こそばゆい感じが、新妻らしい恥らいが、惚ばれて大変良い句であります。小姑といえは鬼千匹の譬で、古句ならもっと憎々しく作句されているだろうに、
『あら、良いお味付ですこと、お嫂さんはどちらの割烹学校ですの』と言う声がきこえてきそうです。この頃の娘さんは賢うなんなされた。

砂風呂は名前を聞かず寝て話し
鈴木 生 仏
昔は別府の砂風呂、今は流行の指宿の砂風呂、のどかな風景で、名前を聞かずによく効いています。名前もではいきません。話す話題も、良い風が吹いてきたただの、夕べの宿の魚の新しかったことだのというふうな話題で、暗い世相の話でないこと、又話す言葉も、気どらないお国訛りまる出と、次から次へと想像がのびて、碧い空に白雲が一つ、半島の上にあるのもみえてくるようです。



北川 春 巢 選

青森県 荒 田 つ る

おいこらと呼んだ女房に先だたれ

春風に唯なんとなく遠回り

コツコツと溜めて其の先き不安がり

助ッ人は口も八丁手も八丁

五分五分の理屈で明日もあさっても

大阪市 小 谷 葉 子

小雨降り続き涙もろい女となる

寶石箱明ける小さく賭けてみる

幻の花を心に咲かすひと

四面楚歌罪の深さをみとどける

花祭り花の心は盗まれず

尼崎市 中 谷 利 美

離婚してからの不幸は口にせず

口だけはもう全快をしてる父

年寄りの長湯をそっと見にやらせ

物好きは失言でした考古学

島根県 堀 江 芳 子

声飛んで出そうな便り握りしめ

笑顔して溝の深さは還らない

ふたりって素的なことね老いてなお

刺しもせぬ蜂を疑う愚かしさ

島根県 榎 みどり

魂を鏡にあづけ薄化粧

有線の話しもつきぬ春日なが

胎児にも食べさす分を山と盛り

年輪のバランス庇う和服の美

島根県 榊 原 秀 子

陽が射すとみせて雨くる上り坂

母の日の嫁の立場へ智恵を貸し

お茶漬けの味今日までをかばい合

はばたけぬ年へ詫びしさしのびより

吹田市 吹 田 三 郎

マンションという人情の過疎に住み

モニターをやめてもアラをさがす癖

素寒貧にて候えば寝連休

八千の ぼたんの精の観世音 長谷寺にて

大和郡山市 森 田 カズエ

泣きそうな埴輪頬っぺをつつかれる

百円を追加茶席の人となり

すぐ怒る父は悲しき元兵士

総婦長だけ独身の婦長会

鳥取市 両 川 洋 々

尼緑之助氏句碑建立(二句)

湧き上る詩情御碕の句碑に佇ち

無神論吾が児が病んでから揺らぎ

銀婚もオランダ坂の雨に濡れ

ベトナムの和平銃眼から覗き

和歌山市 秋 月 宏 方

変身をして随筆も書く社長

句帖持つ心にも吹く春の風

老夫婦花の話をして平和

東京都 山 根 白 星

保護色のまま人生を終るのか

ものぐさのここに極まる乾燥機

お迎えが待つトンネルを抜けたとこ

今治市 渡 辺 伊津志

水鳥の波紋へ春が駆けてくる

名誉職の瞳が抜け目なくなめまわし

池の鯉跳ねて名士が迎えられ

米子市 石 坂 新 雪

付添にすそわけしてるのも女

鎌をとぐ姿勢が生きていた笑い

兄の 死

痛かったとこ割箸につままれる

守口市 岸 本 豊平次

日曜日寝巻き剥ぎ取る洗濯機

署名運動母印も取られ協力し

ヒロインになったつもりで出るシネマ

大阪市 阪 上 十止庵

若者が軍歌をうたう日の恐怖

三女ありて(二句)

大安という日に娘を奪られたり

女三人嫁がせ年金だけ残り

竹原市 三 宅 不 朽

視野すべてみどり達者な母と在り

三日見ぬ間の竹の子へ子等が呼び

決断へどうにか食えるが水を差す

大阪市 堀 口 欣 一

質上げに合せて上げた御仏前
仲人に聞いてなかった倦怠期

米子市 増 田 竹 馬

夢を見るのが楽しい年となり
無精ヒゲのばして若いパパである
深夜テレビに在りし日の美男美女

東大阪市 落 合 思 月

胎動に母性本能くすぐられ
失対のスローで進む溝浚え
使い捨て時代 かがとの片ちびり

鳥取県 林 露 杖

湯原温泉

さっそうとミニぬぎすてて露天風呂

大洲市 堀 内 曉 風

引原ダム(二句)
哀調の唄は湖水の底の声
音もなく湖に手向けの花吹雪
お茶のんでお手を握っただけのこと

東大阪市 坂 東 若 芽

標本の蝶それぞれに美を競い
遺跡発見素人に流行る考古学
好き嫌い案じた程でない安堵

大東市 土 井 浩 輔

母折れてからは娘のやさしゅうて
お社でさえも表と裏があり
白髪増え智恵の増えないもどかしさ

今治市 大 本 巴 ッ ト

ビルを出てビルの大きさを振り返えり
香典のなんぼかがんセンターへ寄付
恍惚を防ぐ昼寝の夢まどか

新宮市 勝 庫 吉

ガールハントする為に買う自家用車
連休日隣も出たぞうちも行く
入学が出来て買わせるスポーツ車

今治市 伊 藤 一 郎

カップルのどこで消えたかハイキング
潮干狩男にまぶしミニ素足
磯薫女盛りを匂わせる

河内長野市 井 上 喜 醉

決断へ八方美人は困り果て

儲からぬ事で老後が忙しい
手作りの風伝授する孫が欲し
共稼ぎして断絶の子を作り

今治市 真山 国彦

駅弁は蓋から食べて食べ残し

小娘のハンドバッグはガムを出し

親馬鹿で玩具部が混む子供の日

今治市 今井 松花

ゼネストへ線路歩きが趣味のも居

ゼネストで線路を歩く萬歩計

安そうに見せて国道端で売り

鳥取市 大塚 豊生

へそくりを足して泳がす鯉織り

東京の垢を左遷で拭きとられ

仏像の正面に座し悪巧み

島根県 安達 潮音

老の目を若葉へそらす孫のミニ

よそ目には老のプライド意地に見え

憎しみと愛と荒磯の藻にも似て

弘前市 小山内 貞男

五十過ぎ横に歩くのもおぼえ

汗泌みた倅せだから崩れない

可憐なる花をだますも人の罪

仙台市 川村 映輝

子に奉仕して夫に奉仕させ

NHKドラマで観光地をふやし

恋芽生えママをお母さんと呼び

守口市 野呂 右近

後遺症残し離婚が成立し
風の糸伸ばす少年夢も伸び
果物も菓子も好むが判らず屋

和歌山市 ふきあげ 虎城

公害の街で公害撤く女

テキを喰う女 口紅氣にしてず

嘘でまた古傷を縫う女の目

三重県 川上 富子

ヘラヘラと笑って急用とは見えず

三Cを鏡うたとなり越してゆき

これしきのダイヤヘゼロがよく並び

東京都 宮崎 美津子

ピンカールしっかりと巻く明日がある

一年分プランコ押しした子供の日

心の扉自然にひらいた暖かさ

高槻市 山田 スミ子

捨て猫がついて来るから振り返り

わびしさをかみ殺して苦笑い

S48・4・8(日) 大阪鉄道病院へ入院

もうだめと思う父ちゃん生きていた
大阪市 村島 秀村

造幣局明治娘も通り抜け

ぼんぼりのてらす桜もちり始め

花の下心うきうき踊る主婦

大阪市 木村 渚水

団子より花々々の通り抜け
へそくりをすぐにはき出す甘い妻
畜生と他人をあてに馬券買う

尼崎市 小

林 文 月

宴待つにマージャンと言うものがあり
無き庭に花観る心禪に似て

樞原市 西

本 保 夫

社史編さん万年平社員狩り出され
ハイミスと万年平社員コンビ組む

和歌山市 垂

井 千 寿 子

緑陰に虫の夫婦も愛し合う
四十年ぶりつなぐ母の手のかたさ

和歌山市 樞

村 ふ み よ

合せ鏡しても愛想の無い白髪
ヒナ売り場孫のない足止まらせる

岡山県 武

元 柳 子

大人気のないいさかいと少し悔い
タンポポの実の飛ぶさまがふと悲し

新潟市 市

川 一 峯

立ちかかる子等に玩具やねじを巻き
流罪の地今はブームの観光地

名古屋市 大

林 曲 心 手

直線で火花を散している嫉妬
結局は捐をしていたお人好し

東大阪市 崎

山 美 子

過ぎし日をたぐりよせつつ手まり巻く
薬にでもする気が豌豆すこし買い

鳥取市 有

田 鹿 の 子

酔うたふりして歌うのもおつき合い
泣しぶき今日の幸せへ虹が立ち

呉市 佐久間

文 明

守銭奴になりたくないが金の価値
華やかに着てマネキンの無表情

豊橋市 鎮

浪 翠 月

限界を知って労使の歩みより
母の日に肩もむだけのプレゼント

松山市 谷

の ぶ お

雨の日の天井低く目を覚まし
定年の河童も皿に水がある

新潟県 高

野 不 二

土曜日を意識しているカラーシャツ
お守りを嬉しく貰う子の土産

大阪市 平

井 露 芳

もみあげを白髪邪魔して延ばされず
同時通訳閣下と云う語が今も生き

愛媛県 小

山 悠 泉

共稼ぎ妻には妻の交際費
アクセルをいつしか踏んで居たあせり

今治市 古

野 伶 人

御迷惑かけて憲法民主々義

ふれ合いを大切にしてお金が必要

今治市 原 田 輝 親

連休の雨銭無しを落ちつかせ

女房と釣り合わずのに髪を染め

兵庫縣 高 橋 近 江

あり過ぎてワラビが軽く労れさせ

気兼ね不要一日一善したまでさ

貝塚市 行 天 千 代

ストや雨花見も思うままならず

リユーマチの旅行は地図の上だけで

羽咋市 三 宅 ろ 亭

農業の希釈度驚を呼び戻し

見出しだけ読んで田植の籠を揚げ

岩国市 村 井 酉 合

重ねても酔えぬ盃娘が嫁ぐ

婚約の風がゆさぶる父の城

いやな奴と飲む破目先に酔いつぶれ

ごろ寝からゴールデンウィークの幕はあく

八戸市 安 田 かつ み

決断の煙草くの字にもみ消され

D51に及ばぬ余生と知りながら

大阪市 新 川 貞 治

ゆっくりと寝る筈の連休に早く覚め

ねたましやテレビ体操のしなやかさ

姫路市 大 原 葉 香

ポイントを切かえ我が家の道とする

グリーン車の客のプライド無口なり

岡山県 船 越 洋 之

デザートにスカンボ食べるピクニック

呼び止める軍艦マーチにまたとられ

須賀川市 平 栗 金 太 郎

過疎暮らし過疎ならではの幸を知り

アベックに当てつけられる観光地

神戸市 佐々木 静 泉

わが子だけ気遣う田舎も同じ母

居酒屋がない夕方を持てあまし

大阪市 松をか 右 弍

砂丘夜がきて足跡と足跡の私語

ハネムーン三朝の河鹿祝福す

大阪市 松 岡 茶々坊

重病で入院妻の愛を知り

付添いの妻も一緒に熱を出し

大阪市 吉 野 志 津

歩こうよせかせかする世さかろうて

馬の顔不在ギャンブルまたたのし

大阪市 内 藤 ますゑ

インフレの嵐に吹かれ老夫婦

光化学花前線のとを追い

大阪市 花田 繁子

岸和田市 池田 香珠夫
よく生きた鏡の中のあばら骨

はた目に楽し竹馬の語らいも

倉敷市 津田 耕水
衣替え麻痺の手脚も満ち足りる

紙魚つきの古本市も眼の薬

羽曳野市 麻野 幽立
下手だから前置がある隠し芸

さめやすい女の世辞にくすぐられ

鳥取県 大坪 天涯
鳥取県 大坪 天涯

鳥取県 福田 陽山

鳥取県 大坪 天涯
口笛へ野良犬疑惑の目でうなり

寝屋川市 井上 武松

豊中市 安藤 寿美子
シナリオになかった女にゆすぶられ

私鉄スト長蛇の列はハイウエー

四条畷市 松岡 茶々坊
海峽の霧がふるさと遠くする

初孫に引かれて引いて遊園地

大阪府 須浦 つね
退院をすればとたんに慾が湧き

青森県 波 ただお

大阪府 須浦 つね
目の光るうしろにママの参観日

老人を置きりにする労働祭

大阪府 須浦 つね
夜の蝶かブルーの色の似合う人

新見市 吉田 落猿

大阪府 須浦 つね
春雨の降る度毎に芝生萌え

写経して今日の仕事も一つ済み

大阪府 須浦 つね
宿毛市 山本 窓花

記念館戦国時代を見てあかず

大阪府 須浦 つね
堺市 栗本 藤持
老眼鏡母子心中がよく映り

和歌山市 内芝 としよ

松山市 豊島 フク
花言葉もない雑草でなおい可愛い
叱った子なに夢見てかニコと笑み

尼緑之助句碑除幕式に参加して

写真も

板尾岳人



昭和48年5月13日、日御碕で尼緑之助氏と句碑
(カメラ岳人)川柳塔社からは生々庵主幹ほか
巨星陣大出揃。

を片手に待つも、お土産は甘い甘いお菓子だった。

大社着、時に早朝七時十九分、さすが神様の国、出雲は朝が早くて、すがすがしい。川柳塔まつえの同志通児氏等の出迎えを受け、車で出雲大社へ参拝。賽銭の多少は縁結びの神様に気がねなのか夫人同行の弘生、大茂津、葵水、小松園各氏は仲の良いことを報告するが如く拍手も大きく、賽銭も気前よく人の背をとび越えて、チャラリン、アン。ふと見れば主幹の手に縁結びのお守りが握られていた。

明けて五月十五日は出雲大社の大祭で日本の神様全部が出雲へお集りになり、賽銭箱の配置及び婚礼式場の運営等について語られる。

朝食後、車で日御碕へ。一とまずレストハウスにて小休止の上除幕式に参列。小雨がぱらぱら、なんとすばらしい雨だろう。人様に迷惑のかわらない小雨、句碑の基礎をがっちり固めて呉れる。振り袖姿の可愛い由佳子ちゃん(尼緑之助氏のお孫さん)の手によって除幕の一瞬がひらいた。

海猫が白い翼をひらいて群舞する牡観が柱状石英角斑岩の上に建つ白亜の灯台、そ

大阪駅中央コンコース噴水小僧前に午後九時二〇分、吸江氏を最後に全員集合。主幹とプラットホームで、すこやかに寝むれますようにと祈りの言葉を交わし乍ら六号車B寝台へ。女性は下段、若き男性は上段、中段は初老男性。発車して間もなく上段より野、雀踊子氏らしい。寝る早さもさすが大ベテランである。中段を寝て下段に五人掛け、両方で十人、車中のホーム・バー・ルームの出来上り、さすが川柳人らしい。縄のれんを掛ければ酒好きな客がとび込んで来そうな雰囲気だった。和酒に洋酒にビールまで、酒の値上がりもなんのその、ちびり、ちびり、がぶがぶ、がぶがぶ。

篠山より無鬼氏が十一時過ぎ、くらやみのプラットホームからこやかな顔で乗って来られ、静かな拍手でお迎え。からっばの酒杯

して、みどりの松と、コバルト色の海の色彩が荒波に削られた絶壁や奇岩の海岸風景が海猫の鳴き声によって、あたかも、尼緑之助氏が日本海の深い底から輝き出るような自然の景観に果しなく大きな広がりとなって果そうとする欲望に、モーニング姿が句碑と重なり合って私は感動した。独仙氏、大社町長、生々庵主幹に続いて葭乃先生(代読・西尾柔副主幹)の祝辞によって尼 緑之助氏の瞳の奥に光るものを見た。

各地方からの大ベテランの集いは川柳塔団結を目的のあたりに見て、頂点だけが裾野はなれて真空のなかに浮んでいると云うことのあるあり得ないことを感ずるのは私だけだろうか。主幹会、中川晃男氏の進行により句会も、主幹選「みどり」で最後の花も冴え、祝宴とつづき、膝を交えて語る柳人の姿が隅々手に手を握り乍らある温かさが川柳塔万才と呼ぶ声が最後の最後までお世話して下さった川柳塔松江、むらくも川柳会、そして尼 緑之助氏の末っ子さんの建彦様各諸氏、そしてプラットホームを走って走って米子駅から送って下さった八木千代さんに、私の心の奥底深く焼きついて、いつでも現像出来るたのしさを残してくださった。

大阪市 市場 没食子

生命とりとなる酒ならん今日も酌む
苦笑して夕の夢を反芻し
湯気遠く近くかすんだ中に裸婦
暖冬で性のリズムもついで狂い
大阪は眠る通天閣の灯も消えた
ガン細胞殖える姿をミクロで見
割込んだ尻もじもと座を抜け
顔までが夫婦似て来る面白さ
モシモシと呼ばれ定期券を見直され
水虫とストレスのまま退官し
速達が着かず誤配の泣寝入り
人生に狸寝もあり面白し

大阪市 大坂 形水

クーラーの野暮川風の窓を閉め
御堂筋良い運ちゃんに乗り合わせ
冷房に動めて合いのズボン下
入社した金の卵の二た月目
解説者の処世観など耳障り
帰郷してなるほど若いのに逢わず
嫁を連れ海を渡って行く墓参
それぞれに巣立ちおとんぼだけ残り
何処さんも悩みごと持つものとする
黙って酌いで黙って飲んで父と子
適当な貧乏強い子を育て
ふと夫婦西国巡礼思い立ち

巻頭作家フェスティバル

この特集を

路郎忌に

ささげる

昭和40年10月号から前号までの巻頭作家43氏
に十二句を自選してもらった。
工藤甲吉氏は八回も巻頭をとっている。
物語作家の十九平、東雲楼、桂仙、藤波、磯
山、清子諸氏や、退会された人は省くことにし
た。(句は発表順)

高槻市 若柳 潮花

きり炭の匂いも久し故郷の秋
腰紐でくくられたまま猫昼寝
誰と逢う雀が朝の羽づくろい
待つひとが有るから爛冷もろて去に
老杉の昼を閉ざして霧ふくむ
燃えた日は言わず憎しみだけ残し
まだ風になびかぬ色で萩が咲き
つま皮を落しラッシュへ押し込まれ
顔ぐつと出して取らせるつけまつ毛
縫いあげて着せて背には帰えずひと
冷えてゆく愛を唇知っている
塗り笠へ江戸むらさきの藤の花

大阪市 不二田 一三夫

仁義を忘れ梅ぼしの味を忘れ
神さまが作った涙だ流さんか
机雑然枯れた一輪さしは詩人
鏡のウソつき 着ものが左まえ
妥協せぬ頑固なタビの右 左
熊がおじぎしてる と人間が思うだけ
骨揚げが調理士だった箸さばき
道連れと知らず晴れ着へ子ははしやぎ
女ごころへ土足で上がって来た 男
一本によられ二人は縄でいる
誤植だらけのような 人と添い
皇后さまも女 ハンドバッグ提げ

奈良県 石倉旅風

酔っているうちは人生悟り切り
 浮子睨みすぎて魚が寄りつかず
 融通のきかぬ頭で誤字読めず
 黒いのを一本抜いたヘアブラシ
 今咲いた花にはそつと春の風
 荒廢の寺の哀しや美しや
 七十の妙味行住座臥の裡
 馴れすぎてベテランらしくなり下り
 盆栽の如き一句にしてしまひ
 人生は然り而して独り旅
 金持が庶民のうたをうまく詠み
 うごめける地表の虫の小賢しや

大阪市 正本水客

焼わかめ春を呼んでる色になる 一石見路
 しだれ桃名もなき社去りがたく 一京東山
 自給自足して尼僧の暮し音もせず 一青海島法船庵
 ひと品ずつ時間をかき料理出る 一京花青
 磨崖仏まひるの陽射すずしくす 一笠置山
 草もみじ果ての果ても陽の名残り 一尾瀬が原
 粉はすぐ生きてる波と虫の音と 一能登殿ガ浦
 粉な雪の軽さ速やま陽に光る 一木曾鳥居峠
 鹿鳴いて暮れゆく海に負けじや 一南予鹿島
 雲はやく波の早さに語りかけ 一足摺峠
 枯草の匂いを消しに雪がくる 一首爾高原
 杉丸太みがく女の手から冬 一京花青

豊中市 橋高薫風

憂国忌 柿は帯のみ残りたり
 滝又水 海を渡って来たわれに
 冬の酒 蛸の足こそ親しけれ
 枯枝に鳥 幾世の友情か
 革命をめぐるらずに湯に身が浮くよ
 手に足に関節のある寒さかな
 吊草は手枷 生涯平社員
 默契や いまも仏法僧が啼く
 反葬は雪の嶺から李花の里
 少年の幾人いても毬一つ
 恋人がいま肉眼に入り来る
 残酷な声 水蓮の眠れるに

豊中市 戸田古方

小さな見栄一番うしろからおりる
 丁竈にタバコの封を切つて朝
 ゴールデンウィーク今日は焦げ飯炊
 古本屋休みでただのまわり道
 台風の通つたあとのクラクシヨ
 留守番が自分のための湯をわかす
 どつちかといえど毒になりそうで
 跡さがしデモクラシーのことです
 田舎娘ですがガイドの声きれい
 炬燵に入っているさかい水がうまい
 ブラットへ来てる犬お前も電車す
 三十年仇名をつけてもらえない

大阪市 本多柳志

父なる神の合せ給うたのが別れ
 四捨五入自分に甘い考科表
 脱ぎ捨てて洗うに惜しい旅のしみ
 石段の中途で鐘に追いつぬかれ
 山紫水明だけではくらし成り立たず
 美しく死にたい慾もちははじめ
 空っぽの証拠大きな音を立て
 礼服で来て平服へ気を使い
 スモッグの底にも街の詩が生れ
 紋れば血潮したりそうな社会面
 くん酒山門に入るを許してよく稼ぎ
 申告書滑りの悪いボールペン

大阪市 福井野迷路

勲章をいのちにかえてみた重み
 勝ち馬に今日の騒ぎが附に落ちず
 窓を出た罵声帰る所なし
 淋しさは舌にころがすウイスキー
 着想は奈落の底でねられてた
 世渡りの一つ酔いつぶされた顔
 確かとは只コツコツと砂が過ぐ
 これ心 王者の如く歩ゆませよ
 涼風のロマンスの私語に耳かさん
 マイペースのリズムに身をまかせ
 テレビこわれ己が心に里帰り
 得意に淡然 失意には泰然 自若たり

青森市 工藤 甲吉

国会の王手は逃げてばかりいる
昭和乱世百鬼に夜も昼もなし
セカセカ人生ガツガツと飯を食い
鬼でなくなるとあの世へ近くなり
起承転結棺桶へふたをする
用が無いから歩いている人もいる
ビフテキになる牛の目のやさしさよ
野良猫と野良猫野良猫をつくり
鈍行を乗り継ぎ母へ逢いにゆく
煙草一本に崩れる黙秘権
校庭の歓声うちの孫もいて
六月は鮎に若葉にミニの脚

岡山県 浜田 久米雄

ひとすじにわたくしだけが歩く道
新聞が来て郵便が来て誰も来ず
また酒のとることなるか花だより
まっすぐに歩くと仏間灯をともし
ほのぼのと女の謎がいまわかり
常連がもう来るころの湯がたぎり
握手した手が離れないまま坐り
老いらくの恋ハンカチにしわがあり
凡人へもったいなくも湯があふれ
他人様に一步遅れて行くころ
雲上の酒がわたしをはしやがせ
年寄りのうれしさきょうは腹がへり

香川県 岡田 拳法

汚職尻の河童議員でござります
此の子等が居てどん底に明日がある
四才に僕働くと励まされ
病む父へお医者になって治したる
なんとでもぬかせとダンブつっ走り
お見舞のどれもカルピスには弱り
悩まない順にいびきをかく療舎
幕末の志士も不逞の徒でありき
コーチには素直に動く車なり
考えは変えずに名前だけを代え
保存会獅子あえぎつつ舞終り
北京詣で君が行くなら僕も行く

竹原市 山内 静水

美しい奥様やっばり子を叱り
たいくつな金魚は泡をつつき合い
たどえばの話へぶつくり来なくなり
趣味多忙お花はバケツにつけたまま
のぞかれて財布すつからかんになり
仔犬ちよろちよろおらかな私について来る
子に詫げる心四、五日定まらず
夕焼を砕いて砕いて寺の鐘
天高しあくびとがめる者ぞなき
信念に生きて世間の風当り
平凡な夫婦で人にうらやまれ
ふり向けばつかず離れず妻のいて

大阪市 中川 滋雀

丹精をこめて枯木にしてしま
まっすぐに歩けば嘘につき当り
縁あってここまで漕いだ浮き沈み
満ち足りた日の寿と書いてみる
ふり向いてても足音だけの僕
人生暮色枯葉が後や先になり
いっそ朱にまじれば楽な筆を見つめ
開けにくい戸を押し売りが軽う開け
波紋なくきた人生をあたためる
気心を知って静かに放つとかれ
消しゴムの働きとおしてきた丸み
春惜しむ子規の心になって描き

宝塚市 傍島 静馬

一電車ズラして掛け譲らされ
サングラスとればおぼこい顔してる
寝つかれぬ夜はそこらが痒うなり
性格がどうのこうのとまた生れ
何よりも阿呆になれという見舞い
遺言をしてから病氣持ちなおし
愚痴云々ぬようになつたらお迎え来
膳本を取って金婚線つてみる
髪洗う男の線は絵にならず
おそるおそる出したオカガがお気に召し
竹割ったような男にゼニが無い
趣味の人などと云われて半可通

倉敷市 本田 惠二朗

静けさと遊ぶ楽しさ見つけたり
活け終えてしばし見惚れる小さい幸
心のみずうみで童心が泳ぐ
岩毅然怒濤に胸をかしている
磯の松波追い返えし追え返えし
枯れ枝になにか囁く冬日差
一本杉写して水の独り言
人生街道故障と修理繰り返えし
老婆心前口上が長くなり
ほんとうに粗品をくれたからうれし
冷凍魚不動の姿勢で値切られる
なんとなく庭下駄履いていた思索

大阪市 山川 阿茶

方門に従う水の大あはれ
こおろぎよ何うろたえてわが膝に
地下道を死場所にした秋の蝶
不用品金に換算して捨てる
サンキューじゃ礼を云われた気になれず
応援団の大きな欠伸写される
ダイヤになれぬからダイヤで身をかざり
なまじっか頭が切れてヘルメット
嘘つけと声あみしうな誓詞読む
狒犬がくしゃみしうな花吹雪
飲みたがる男 着たがる女 秋
足腰をきたえきたえて癌で死に

大阪市 西 出一栄

添わしても根じめの花はあっち向き
新緑に酔い酒に酔いバスに酔い
飛躍するすべを忘れた鬼に似
すすきの穂こよみ通りに顔を出し
冬近く仙人めいたすき茶の穂
倦怠期その都度変るおす茶の味
早すぎる秋へ木の葉の正直な
清荒神代参させて気を休め
筍の序に長岡天神拜まれる
やわらかな陽射しへおしめ解いてやり
生け花にもされずカンナの炎えにもえ
胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ

大阪市 西 森 花村

元旦に見た覚えあり青い空
冬山は楷書で書いた尖りよう
天と地の間をひよこ駆け廻り
春の水身投げのように椿浮き
咲くも春散ってゆくのも春と知る
小遣いをやれば雨でもせがれ居ず
もうこれでしまいと雨だれ日に光り
八月も同じ値で売る風邪薬
寝かえれば壁の高さよ秋一人
秋の風大仏さんの膝が冷え
父母ありき娼婦の胸に秋の風
ポーナスにココアと花をかう若さ

東大阪市 久米 奈良子

ひとり旅細道なれど夢があり
女坂いくつ越えたら辿りつく
吹き溜り落葉となりしめぐりあい
むき合えば素直にとける角砂糖
愛の証しさぐれば揺らぐばかりなり
迷いきし鳩の瞳はわが愁い
絃の悲しみ風が来てかきならす
秋風の吹かれるままにおみなえし
さからえば母の白髪が目立つなり
夜の河透かせばやはり流れてた
白珠を濁りに染めず抱きつづけ
淡墨のひそかに放つ愛と識る

伊丹市 小川 静観堂

父の時 母の時より淋しうて
天国へ淋しかないか一人旅
雲に手を振って亡妻もようお寝すみ
どの写真も後列ばかりの妻だった
俺の余生遺影の妻と差し向い
敗戦の責めこのへんでご勘弁
わが人生の欄外に朱書す憂国忌
スリーブの醒めない距離に恍惚の人と対す
梅雨晴間支那の画風に山煙る
湿舌は女にもありむかしから
精子一億一疋のほかは総懺悔
バレンタインの日をチョココレートを貰う

名古屋市 吉田 水車

変人のために笑えば笑らわれてかたくなに言うて折れるを待つており
 気が向いたのかネクタイを賞め
 人生の誤算カバン重たし
 運勢の吉に追われて靴を履き
 人間が真つ正直ですぐ怒り
 ポスターだけが笑顔で迎え
 ニツ三ツ辛抱をして一ツ買ひ
 ニッポンの音を八雲は下駄に聴き
 仕立おろし能を舞うかと思われる
 鰻どぶり鰻をあつちこつちやり
 初日の出何はなくとも深呼吸吸

城陽市 大鶴 喜由

国は看たし子は看たくない老後
 恋愛に商術があるあさましさ
 当人よりぐるりが不孝者と呼ぶ
 夏はいや胸のふくらみ細くして
 ワイ談の場所を違えて見下げられ
 もみ上げよりそれをする氣を母なげき
 親を安んずるこれ孝なりをどうする氣
 好きというあかえし雪花があり
 年寄りのささえ月雪花があり
 あの時はその氣だったとわびる恋
 同棲を引裂きに来て手錠され
 一円貨見て見ぬ振りて通り過ぎ

大阪市 金井 文秋

むしタオル汚れを中にして返えし
 財布ぶつちやけて負けさず錢を読み
 見栄捨てて暮しに合ったバスに乗る
 子ほんのうパンチの効かぬ眼で叱り
 割勘にしろこ何時また逢えるやら
 愚痴ばかり云うてて總會では無口
 明暗の暗ではそぼそ小商売
 売上げを何度も数え売れない日
 誤字なんぼ直されてても気が付かず
 金儲け下手とは妻ももう云わず
 呑んべえに嫁いだ娘らの父飲まず
 惜しまれて死にたし長生きもしたし

堺市 高橋 千房子

今一度わびたい人にさけられる
 聞いてきたよい事だけを口にする
 腹立ちを明日という日へ袖ただみ
 逢うて来た余韻氣づかれまいと脱ぐ
 つけまつ毛涙を何とうけとめる
 人生の坂道今日も又すべる
 幸うすき人への言葉行びます
 棲合わぬうそを許しておみせ汁
 忍耐へ風船玉は割れて見せ
 つけまつ毛弱氣を見せぬ顔にする
 倅が逃げそう指輪まわる夜
 噴水の頂点みつめ爪かじる

倉敷市 小幡 里風

証文を破るきれいな話し合い
 海へ来て男 本当の事を云う
 この理性奪う美しくさを憎む
 似た人へふと振り返る過去の傷
 ポケットの拳が僕へ味方する
 母とだけ一字書き度い白い壁
 晩運を信じ踵のちびた靴
 親指で対決というペルを押す
 平凡でよし母と子が描いた虹
 原色に挑戦されている調和
 真珠貝真珠を抱いている憂い
 母の日に父も嬉こぶブラン練る

大阪市 吉田 圭井堂

家計簿をきっちりつけてしめとらず
 忠実に書けば歴史書売れぬなり
 とかけ食う声とも知らず耳を立て
 大物が火がつきそうで打ち切られ
 盗泉の水をがぶがぶ飲む時世
 がら空きのバスがあとから従いて来る
 めめてみれば連続安打無得点
 タクシーで行くと我が子には乗らず
 金策に乗り回すとは思わざり
 両替えて自動機で買う阿呆らしさ
 拾い手待つアルミ貨がまた蹴られ
 ばねの効くうちには女も従いて来る

出雲市 尼 緑之助

灯台の夕陽 神話を抱きよせる
 善人の努力はその日過すこと
 椎茸も春を叫んで腰を上げ
 籐の目 砂のいのちを呼び返し
 人間を支えたルール 古しと
 運不運 開くばかりの隣り合い
 女なるかなと言いわけにも涙
 たたかひのリズムハッタリのぞかせ
 突っ走るニュースも公害と思ふ夜
 明日あるを信ず今宵の虫しくれ
 又雨か秋よ煎茶を濃く入れる
 国会も世間も俺も十二月

富田林市 岩田 美代

残り火が炎えそで消えそで秋になり
 思い切りおしやれしてみろ秋を出る
 倅せを落したようでもらう返える
 エゴイズムガムといっしょに噛んでる
 感情の起伏の紅が濃ゆすぎる
 ひしめいてまだ沈黙の玉椿
 トラックのラジオはワルツ水菜積む
 ふんまんを聞いてもらうにやさしすぎ
 心境とうらははらこーヒ甘すぎる
 空虚感南京豆はかんの底
 ふり上げた蟹のはさみがまだ青し
 美しい女のクイズが解けたし

大阪市 天正 千梢

叩いてくれる本があり有難し
 沢山の人が歩けば道になり
 ただれた心お観音様抱いてくれ
 歯車は個性の表現許さない
 軽卒に夫も幸福と思ひ込み
 不求所得三児育つ上げ
 つかの間の人生長くつめいだけ
 忘却に救われ横着者になり
 過去を断絶華麗に滝落下
 故郷の山あやまちもほめてくれ
 人きらい秋ともなれば人を恋い
 合掌をしても雑念かけめぐり

島根県 小砂 白汀

海底を剝製にして板わかめ
 シルエットそこから闇が深くなる
 弾道にまたがる反逆者然と
 悠久へ砂のうた描く砂時計
 落ち椿処女喪失の日の涙
 アクアリングで地球の恥部を蹴り
 ゆっくりと積木崩るる自己否定
 つぐないのごとく蝸牛地に這えり
 悔絶ゆることなし花芯散りしきり
 リボンきりりと 女 輝けり
 生き生きとして帷巾濡れてくる
 アスファルトまたも不毛の地をひろげ

倉敷市 水粉 千翁

草の種いつかこぼれていたい
 妻と子へつがなく脱ぐ今日の靴
 自惚れを喋れぬ鳥の瞳がまるい
 きしむとも砂漠に陥し穴がない
 ひとり言雲の行方を知っている
 運命を握りつぶしてよく笑い
 波くねるおんなのしう恥心が炎え
 罪多き橋の長さを川は透け
 逃亡の日記は白きまま喋り
 凍てついて蠟人形の愛炎える
 白紙喋って墨痕淋漓
 ペン尖る女の夜の貧しさに

京都市 都 倉 求 芽

もう戻れないとこへ来てから思い出し
 むき出しの刺をサボテン愛される
 切れぎれの夢に時々灯をともし
 言い直すたんびに焦点ぼけてくる
 曲がろうとしない水が進しる
 新緑の候 古利甕る
 妻の留守子は父親を頼らない
 ご先祖はたとえ賊軍でも旧家
 物わかりよすぎすぐによ協する
 筆不精みこして電話かけてくる
 一日ぐらい蝶をだますな冬の陽よ
 目覚ましの馬鹿正直に小突かれる

島根県 藤井 明朗

太陽の平等スモッグを破れず
 鼠にも中年太りにくらしい
 金の要る相談今更抜けられず
 苦勞買います歌だから言える
 砂ほこり浴びてもパスは追いつ
 ささやかな避暑ふる里の風の中
 レジャーを追うて足許見失しない
 まだ気がつかず先手に教えられ
 何げなく暮しほろりと悔残る
 意見百出結局まとまらず
 追えば逃げる幸せをあきらめず
 すこやかな汗 太陽と向い合い

倉敷市 小野 克枝

ポーナスの語 女の耳で聞く
 転んだ子 一生懸命笑つてる
 返さねばならない傘に雨が降る
 美しく別れましたと もと夫婦
 大空の広さを知らぬ蟻でよし
 夕焼けがきれい やがては旅立つ子
 黒いパンが飛び出す 小さな不倫
 祝われる身のありがたさ 桜咲く
 川岸を歩く女になりたくて
 急に振り返って いやなものを見た
 疑いを残す 雨垂れ手に溢れ
 朗々と読む 素晴らしきすねかじり

香川県 三井 醉夢

余生など牡丹は知らぬいさぎよき
 男には見せまじ牡丹散るさまは
 今を生きる牡丹の贅を見極める
 幻想のレールが光る走らねば
 悪縁と思うはノラの血が流れ
 シグナルは赤人妻のおもい絶つ
 すざまじきものに女のうす笑い
 子遍路の長い祈りは何ならむ
 遍路ではないが心に鈴を持つ
 シャッターを上げ秋雨を聞きに出る
 あれやこれ地酒を給う冬の旅
 自画像にうす紫の花を置く

島根県 堀江 正朗

妻の目が子の目がみんな僕の目だ
 ふみ台になる倅せの重み知る
 確めて見ねば手さぐり気が済まず
 妻といて何の不足が春の宵
 意地悪か年のせいだか早く起き
 ロボットに劣る動きを繰返し
 光り欲しせめて妻病む間だけ
 見えぬのに色で歯ブラシ決めてくれ
 妻は月僕は虫の音たのしまん
 音に生き音の多きをもて余し
 腹立ててみても相手は妻と子か
 睨閉す耐える苦痛が洩れぬよう

和歌山市 垂井 葵水

絵馬揺れて乾いた音が吹き抜ける
 水仙の花撰る指が太すぎる
 ヒロインの後ろではころび縫うている
 お世辞抜ききでという嘘の美しさ
 ビラを帖り終つてピラに振り返り
 イラストで描かれてボクは誰なのか
 背を見せるとき崩れてるサン格拉斯
 城に月街の律動乱れない
 流しソーマン水の旨さもすくてくる
 純真さ迫り男の智恵惑う
 幻想の素顔悲しい過去を持ち
 捨てられた方が男である喜劇

松原市 谷垣 史好

手術日の外はうららか春の風
 一人雇えばこども気を使い
 混浴と聞いて眼鏡のまま入り
 八字髭 悲しいときもピンと立て
 制服を着て気味悪い大学生
 透明ないのちとなつて昇天し
 会議空転 天井ばかりが高い
 喋り倦いて心貧しい夕暮れ
 秋の酒恋しが人もどきが煮える
 街道に一つ灯がある何でも屋
 白雲悠々あてなき旅に出てみだし
 棺覆うとき最も星条旗らしい

神戸市 小浜 牧人

ゴム風船飛ばす空から春がくる
遠いひと憶う鈴蘭燈が点き
縹雲ひろがる果の死を思う
掴えてみれば小さな慾だった
リモコンの思うがままに踊らされ
有為転変指のダイヤが消えている
バイブルへ掌をのせてより愛重し
花へ私語洩らして女ひとを恋う
会心のヒットも打てず老いゆくか
根性一筋男の耳が潰れている
屋台そば精一杯に生きている
おでん屋の隅で孤独を温める

竹原市 森井 菁居

日めくりの早さを俸せとも思い
愛すればこそこの冬をこの坂を
流されてやろう勝気な水すまし
かがり火へ鮎は自滅の道選ぶ
鳩は鳩なりに苦勞がつきまとい
ベルシャ猫過保護に慣れてきた欠伸
汚れても海しか貝に家がなし
不死身めくサボテンにして水に負け
育つ子へもろき夫婦のしこりかも
愛憎の渦を夫婦として耐える
子の爪をパチリパチリと夜がまるし
これ以上墮ちぬ安らぎかも知れず

桜井市 岩本雀踊子

美しくやつれた娘が孫を連れ
鼻唄は平和な人の労働歌
大阪の味にきつねと云ううどん
六人を育てた中にも右派と左派
鳩の目を持たぬ一匹と云う男
冷戦へ妻の斗志は静かなり
手のひらの日銭暮しの詩がある
爪切って孤独の私から逃げる
よそ者の恋が泣いてたあかね雲
私にもあった嫉妬にうるたえる
台風よそれよ故郷に母が居る
社用族もったいなくも胃散飲む

キリストの

高 鷲 亜 鈍

キリストの血でイスラエルを消しちまえ
整形をしてもイメージチェンジにはならぬ
空が駄目水駄目空気駄目
星屑のように散りたし流れたし
リオン市に癌研究所が出る
ポーナスはみんな家賃に積みたてる
親とは別に連合赤軍歴史が証す
テリアブルに靖国神社とは皮肉

予科練とおない年なる赤軍派

純粹の上にも純粹神の汚点

神はきれいきたないのはわが神

おまえおれバカ正直がいいところ

沈思する石 腸に詰っている

煩惱うすくなるにしたがいペンをとる

あれやこれどうしようもない無力

堂々と槍ふりかざす甲虫

なにくそとなにくそと今日を生き

奮いたつことがあっても闇に消え

男は男 女は女ぶざまな対立

年老えば勝手に死ねるようになり

総白痴美空ひばりとその亜流

太陽に鴉が住むという民話

怒ったら向うも怒るおない年

戸迷うて小豆相場がかかってき

転業の秘密コクトオじゃないが

盲目けらかしたも盲目タレントになれず

キリストの如く海原歩きだし

又しても溜息ひとりぐち

芝居気と笑い俺は本気で泣いている

レベルアップ生活保護にさえ

—— 電話開通 ——

探り寄り手繰り寄せてる君の声

見えぬけど声聞き分ける耳がある

長距離の尾道弁がなつかしい

繰りごとに答えてくれる長電話

居ながらにうれしい声があちやこち

爽やかな大会

橘 高 薫 風



主幹はじめ関西勢の旅カバン（カメラ岳人）

川柳たましま社十五周年記念大会は、日本晴れの五月二十日（日）午前十時から倉敷市の玉島公会堂で開催された。出席者一九二名、投句者六十一名という盛会ぶりだった。本社からは、選者の中島生々庵主幹、西尾栗副主幹、講師の川村好郎氏をはじめとして大阪方面から二十名、地方から、山内静水・高橋鬼焼・林野麴光・三井醉夢の同人諸氏が参加した。

開場午前十時、開会午後〇時三十分。司会は本田八笑入氏。会長の臼井三林坊氏は、開会の辞で、良寛和尚ゆかりの地で多数の出席者を得て開催する光栄と、服部十九平・井上旭峯、その他指導に尽力された物故川柳人而言及、今後の川柳界に微力を致したいと決意の程を披瀝、挨拶とされた。来賓祝詞の後、参会者代表祝詞を生々庵主幹が述べられた。出雲の尼緑之助句碑除幕式に参列、その他公私に多忙を極める主幹はお疲れの色普段に増して濃いようにお見受けしたが、古い雑誌を調べて原稿をきちんと用意して話されるお人柄は、川柳塔社の誠実さに現われ、川柳たましま社の地味なそして真摯な活動に通じ

るものに思われた。主幹は、川柳発祥の江戸時代から明治・大正・昭和の川柳の歴史の大概を述べ、今日の玉島大会をふくめた現代の川柳界の隆盛に触れ、物故先輩の業績、殊に指導者の若い時代は如何であったかと、大正十二年安川久留美氏執筆の一文と、井上信子さん宛への路郎先生の手紙の一部を引用して、恩師麻生路郎の横顔を紹介された。川村好郎氏の柳話は、兎と亀の童話から、一歩一歩の努力の積み重ねの必要、兎は兎の句、亀は亀の句を創るべし、そして頂上を目指すべし、頂上とは、路郎先生の名言である「いのちある句を創れ」に外ならないことを強調、参会者に深い感銘を与えられた。水粉千翁氏の特別課題の選の他、臼井三林坊・西尾栗・本田恵二郎・森中恵美子・中津泰人・室田千尋・丸山弓削平・逸見灯竿・大森風来子・中島生々庵諸氏の選は新旧相俟って披露の進む程に熱を帯びて来るのだった。披露に先立ち、本田恵二郎氏は、十五周年のうち十三年間課題吟の選をしている、自分が題を出すので、意地の悪い題を出して困らせてやろうと思うが、会員諸君をますますベテランにするばかりだと軽妙な恵二郎節で祝詞を述べられた。

私は、三林坊氏の言葉にもあったが、十九平、旭峯氏ら指導者の面影が浮び、兼題の石・天から、旭峯氏の句、「つまずいた石が教える自己過信」「裏庭に青空がある車椅子」などを思い出すのだった。閉会の辞は香西流風氏、大先輩の髭の貫録であった。大会の成

績は、一位岡山知事賞に当日誕生日の寺尾俊平氏、二位倉敷市長賞に田中好啓氏、三位倉敷市議会議長賞に加地一光氏が入選受賞された。本社の同人では高橋鬼焼、本田八笑人、松下梁水、長谷川紫光、本田恵二朗の諸氏が楯を獲得され、有意義な大会は終了した。

開会に当って、司会者が、この大会では選者並びに講師の諸先生をさん付けで呼称させて戴きたいがという提案に参会者は拍手で応え、会は、中島生々庵さん、川村好郎さんで進行した。倉敷市長代理、県会議員の来賓諸氏や選者諸氏の胸に、従来の川柳大会で見られるような大きなリボンをつけることもな

近 詠

須坂市 高峰 柳 児
 伝説を語る古老の輝く瞳
 年金にしがみ老醜隅で生き
 弱っ気がせめてみくじに支えられ
 大洲市 米 沢 暁 明
 月清し誠意届いた帰り道
 あっさりと詫びて飲む酒うまい酒
 一言が波紋をえがく程出世
 今治市 月 原 宵 明
 とちちめておいて税吏はご米転
 嫁にゆく娘がこれきりの料理する

く、すべて爽やかな会であった。歳月の経過するにつれて思い起こすことの多いであろう「たまし十五周年記念大会」であった。

弓削川柳社創立25周年「紋士」三百号記念

第25回西日本川柳大会

とき 9月9日(日)午前8時開場
 ところ 岡山県久米郡久米南町・久米南中学校体育館

兼題

朝・願い・心・ひとり・空・ブルド
 1ザー・変身・裸(はだか)・断絶

(尼緑之助句碑建立)
 ウミネコも神話に生きる日御碕

岐阜市 市川 鱗 魚
 資本主義悲しき疑惑もつ政治
 口答え男が意地の平手打ち
 箸箱の艶もよろしい夫婦箸
 東京都 池 口 吞 歩
 応接間エンゼル・フィッシュまで気取り
 出目金の媚をピラニア無視したり
 水槽に飼われ野心もなき緋鯉
 今治市 長 野 文 庫
 その途中一鉢もらい引っ返し
 弱いのが勝って解説うるたえる
 菓子皿の絵が泣きそうな巴焼

選者

中島生々庵・鈴木九葉・福永清造・三条東洋樹・榎本聡夢・大森風来子・尼緑之助・長野文庫・片山巷雨。

席題

当日一題、ほか特別課題一題
 締切 2句以内、投句せん使用8月末日着

会費

(出席者は当日午前十時半厳守・兼席題共)
 六百元(発表誌・記念品・昼食)投句だけ三百円、発表誌郵送・切手可

呈賞

岡山県知事賞ほか9賞を総合成績でほかに三才賞(出席者優先)

主催 弓削川柳社
 後援 久米南町ほか各団体

祭り

有信新之助選

ふるさとの祭りテレビでみる飯場 カズエ
 インフレもデフレも言うところ祭り 本蔭棒
 哺乳嚙喰わえて坐る雛祭り 伊津志
 地球の裏ではリオのカーニバル 智司
 一本を提げて飲む気の祭り客 軒太楼
 家々が自慢で喰わす祭寿司 弘生
 祭太鼓の名手が街で皿洗い 十止庵
 伝統の踊り復活した祭り 球磨蘇
 祭り酒満員バスをほほえまし 弘朗
 手拍子も酔うてるらしい祭りの夜 重人
 お祭りへスリも刑事もまぎれ込み 寿美子
 春祭大漁ばやしは男山車 善句
 出稼ぎの父待つ祭り無駄に過ぎ 英詩
 シャッターを閉め囃子の稽古に出 豊生
 来年は祭りに招ばぬ仲たがい みのる
 祭り客ハモとタコで酔い給い 浩輔
 お祭も母はあとから箸をとり 白水
 喪服着て祭りの道を通り抜け 耕水
 拗ねて出た村へ帰った祭りの夜 国彦
 家中の灯りを点けて宵祭り 梁水
 祭神は知らぬが寄附をしまし 敏
 出稼へテープで送る村まつり 翁童

遷宮に賑わう祭りの餅拾う 祥月
 宵宮のまだ酔うていぬ太鼓の音 眺明
 お見合も兼ねて祭りの客となり 七面山
 旅先の祭やたらに押すシャッター 貞祐
 花餅かざり祭り迎えるたたままい 度
 真四角にビルへ紅白吊る祭り 宵明
 鯛さげてくる友のあり春祭 里風
 太刀佩いて時代祭りのアルバイト 輝親
 祭りから祭りで稼ぐ声か濁れ 白星
 警察の仕事が増えてきた祭り 可住
 お祭りが済んだら嫁ぐ巫子の舞 右近
 お神輿は町の息吹きを新たに 静観堂
 出稼ぎへ祭りが見える子の便り かつみ
 禅の締め方習う夏祭り 素身郎
 抱き起こし祭囃子を見せてやる 落猿
 車椅子みこしを遠くから拝み 思月
 宵宮も団地は静かに暮れてゆく 無人
 療養所祭りの太鼓を遠く聞き どんたく
 夏祭り汗の匂いに客になり 芳子
 そこだけはまだ起きている祭の灯 与根一
 佳
 祭り酒さまして帰す自家用車 一郎
 ハミリにカラー我が子の稚児姿 章雅
 コンピューターとは別々祭り嬉々 古方
 肥満児も混って山車を引いている バット
 名古屋祭り武将眼鏡の人ばかり 香珠夫
 人
 採み合って裸祭りは湯気を立て 松花

甘言

和田一乃字選

地 漁があるから若者がいる祭り 伶人
 天 こっぴりの高さで祭り歩いてる 千翁
 軸 指つめた昔の意気で山車に立ち
 甘言を聞き流してた葱坊主 伊津志
 甘言と悟る女のしのび泣き 里風
 甘言とは知らずせせと通いつめ 金太郎
 親切な男が釜カ崎で待ち 白星
 甘言へ親友忠告してくれた 秀峰
 甘言の舌に乗ったら呑みこまれ バット
 甘言につられてマダム処女を捨て 七面山
 甘言を言う先輩を軽く見る 季贊
 さりげない殺し文句に女ゆれ かつみ
 甘言と悟った頃にはすっからかん 度
 凡人の悲しさ甘言信じきり 思月
 甘言へ愛の炎の燃えたぎり 球磨蘇
 甘言をほどよくあしらう苦勞人 三十四
 甘言がこんなところで待ちぶせる 古方
 甘言に弱い女の転落詩 句珠夫

甘言へまたひつかかった今成金 明春
 甘言と見ぬげず又も煮湯のむ 英詩
 甘言に乗せた乗せぬで家裁の門 右近
 甘言へ身構え出来る齡となり 春日
 へそくりがつい甘言に乗せられる 木魚
 人生に甘言通る道もあり 藤持
 甘言と夜逃げされてからきづき 与根一
 甘言と知っても親は出してやり 豊正
 甘言でくどけるような女じゃなし 敏
 甘言も度重なれば底が見え 陽山
 甘言の落し兎ロッカーはやりだし 芳子
 みえすいた甘言承知の顔で聞き 重人
 甘言に乗って虚栄の夢を追ひ 利美
 甘言へ女の性が逆らわず 静泉
 孫娘もう甘言を心得る 弘朗
 甘言の女に紐がついていた 古心
 甘言に乗ってしまった悪の道 祥月
 たたき売り甘い言葉で客を寄せ 好一
 甘言が法の盲点ついてくる 梁水
 甘言と知って聞くから面白い 暁明
 佳
 甘言へ一丁のって見る若さ 木陰樺
 甘言に乗ってやるのも母の愛 輝親
 甘言を弄する猯が二つある 逸名
 甘言についほだされて描く紅 軒太楼
 甘言につられ苦言に背を向ける 落猿
 人
 甘言と気づいた獄舎の闇の中 翁童

埋れ火の寡婦を甘言燃え立たせ 洋々
 天
 甘言の真偽ダイヤの価値が決め 苦句
 軸
 甘言に負けた女の不倅せ
 名 士
 北村三歩 選
 土地売って紳士録にも顔を出し 香珠夫
 肩書を名刺の裏にまで並べ 松花
 知名士をすらし並べて選挙戦 明春
 あれこれと首突っ込んでいる名士 千翁
 のど目慢町の名士も鐘一つ 智司
 知名人らとポーズでインタビュー 芳子
 あの花火名士となったお国入り 里風
 愛称で名士迎える故郷の駅 梁水
 故里へかえる名士の標準語 カズエ
 初恋の人が故郷の名士なり カズエ
 郷土出身石碑に残す筆の跡 古心
 裸から築いた名士の国訛り 与根一
 怪しげな組織に名士かつがれる 香珠夫
 会長に名士をすえて趣味の会 悠泉
 名士まだ陰の恩人忘れない 白水

飛行機でテープを切りに来た名士 扇水
 一寸来てすぐ帰ってゆく名士 里風
 名士またゴシップ欄のネタにされ 輝親
 マスコミに追い廻されている名士 芳子
 同窓会名士昔の名で呼ばれ 思月
 受付の順を名士に乱される 扇水
 腹割って話せば名士も悩みごと 魚山
 名士にもあった意外な泣きどころ 思月
 故郷から名士としての奉賀帖 暁風
 着流しのまま交番へ来た名士 白星
 名士いま閑居の奥で時を待つ 本蔭樺
 肩書きがいつか名士にしてしまひ カズエ
 肩書きが消えて名士もただの人 潮音
 名士今日KLMで旅に立ち 浩輔
 佳
 仲裁へ名士の顔も立てておく 翠月
 スケジュール名士故郷を素通りし バット
 トラブルへ名士一枚噛んでおり 春日
 プライドへ仮面をつけている名士 芳子
 まず秘書をつうじて名士顔を出し 翠月
 人
 つい口がにった名士の車中談 利美
 地
 名士フツ次のプランを考える 季賛
 天
 別宅で名士の仮面ぬぎすてる 思月
 軸
 相談に名士相談する返事

初歩教室

題「深」

本田恵二朗

俗塵を拭う深山の風を聴く
 (俗塵を深山の風が拭いてくれ)
 (俗塵をしばし忘れた深山風)
 焦点の深さを無視する意地あわれ
 (焦点の深さを知らぬ意地あわれ)
 見える眼を神に返した深海魚
 (神に目を返して深海魚になろうか)
 決断へも一度深い呼吸
 (決断へも一度大きく深呼吸)
 ほり深いしわに辛酸労苦秘め
 (彫り深い皺に辛苦の過去を秘め)
 スキャンダル深入りしたを悔い
 (醜聞が流れ深入り悔いている)
 深甚の謝意を表してせいせいし
 (深謝して戻るすがしさが軽い)
 深山路に誰にも見られず咲いた百合
 (谷深く咲く百合よさびしかる)
 焰とはならず深部の火がいぶる
 (焰にはなれず心底深くいぶり)
 失恋の深手を波に洗いたし

品 充
 大 成
 貞 祐
 静 泉
 度
 三十四
 頼 次
 つ ね
 露 杖
 同

(失恋の深手を洗う水探す)
 意地張ったばかりに深い溝ができ
 深い事情あって添えぬ恋悲し
 (恋かなし添えぬ事情が深すぎる)
 深山の桜はほめる人もなく散る
 (めでられる日もなく深山桜通く)
 深緑の山に一声ホーホケケヨ
 (うぐいすの声がみどり深うする)
 那智の仙境深い緑と流慕う
 (深みどり真二つとて流しぶく)
 デートでは愛の深さもまだ探り合い
 (デートまだ愛の深さを探り合い)
 百までは生きると欲の深さ見せ
 (百までも生きる気らしい欲深さ)
 人生の失望深い情で立直り
 (深情に触れて人生立直り)
 人前は他人顔して深い直り
 (他人顔してすれちがう深い仲)
 (深い仲だとは見せない深い仲)
 美しき思い出に尼寺の奥深く
 (胸深く思い出秘めて尼しずか)
 また今日も深夜テレビにつきあいし
 (またしても深夜テレビにとらえられ)
 深切にすぎると言い妻は妬き
 (深くもほどがあるわと狐色)
 吸い溜めて帰るつもり深呼吸
 (愛情の深さをそるばんでほじき)
 愛情の深さをそるばんでほじき
 (愛情の深さをそるばんでほじき)
 深い緑をたすねつつハイキング
 (ハイキング深い緑におぼれそう)
 汐風と闘って来た深いしわ

誓 二
 同
 同
 駒 子
 志 津
 藤 持
 茶々坊
 陽 山
 好 一
 静観堂
 敏
 球磨蘇
 カズエ
 同
 ますゑ
 繁 子

(汐風とたたかい抜いた深い皺)
 深追いをして負かされたホ囲碁
 (深追いの碁石が背負い投げをくい)
 深酒を呑んでからだをこわすなよ
 (深酒は毒だと額の亡父の声)
 深入りをしすぎて根こそぎしてやられ
 (深入りとのどのつまりは無にかえり)
 胸深く秘めて退く恋もあり
 (胸深く秘めて退く恋あわれ)
 青く澄む湖水の深さに引き込まれ
 (水青く深く心を引きよせる)
 さりげない一言心に深い傷
 親の手がもう届かない深い仲
 思い切りの悪さが思慮深く見せ
 (決断の悪さを深慮とまちがわれ)
 これ以上深い知識は要らぬ職
 深追いの的がはずれて弾がつき
 水溜りの深さはかる子の散歩
 (ゴム靴で深さを計る水溜り)
 (水溜り子のゴム深にみくびられ)
 深呼吸一番やる気の胸を張り
 明日に燃え深夜明るい思慮
 再考の余けなし父の深い思慮
 椅子深くかけて話は五分と五分
 動揺をぐっとこらえた深呼吸
 深刻な顔へ冗談引つ込める
 政界と財界こっそり深い仲
 友情の深さしみじみしのお宵
 深き夜を一声鳴いて鳥の声
 (深き夜を切りさくように鳥の声)

明 春
 秀 村
 贊 平
 満津子
 かつみ
 比呂路
 生 仏
 一 二 三
 利 美
 無 人
 伊 津 志
 右 近
 同
 慶 彦
 同
 本 蔭 棒
 同
 濁 水
 同
 つ た

井戸深く空が一枚落ちてゐる
意味深なサインへ一寸うろたえる
人間の弱さ深みに気がつかず

寿美子
同人
重人

文鳥

本田恵二朗

朝のみどり風を胸一杯に吸い込んで、背伸びをした私の網膜に、ふと真白い小鳥が一羽写ったと思ったら、それがいきなり私の肩に飛んで来て、頬のあたりにキスしたりなどするので、私は夢ではなかるうかと、驚いたものだが、気を静めてよく見ると、清潔で可愛ゆい文鳥ではないか。どこかの家で愛し飼われていたのが、着陸はなされたにちがいない。飼主もいずれ遠くではなかるう。私が差出す指先を、なにかつぶやきながらうつつきに来る。ちよいとつかんでやろうとすると、まんまと逃げる。いささかほん弄されて疲れた私は、縁側から部屋に入って休憩の姿勢になると、文鳥も一緒に飛び込んで来て、私の肩や膝にたわむれる。私の手にとまったりと目を、まんまとつかまえたが、安心してた目が澄んでいる。大急ぎで隣家から鳥籠を借りてきて、餌やら水やらの大歓待となった。飼主の早期出現を待つには、どうすれば効果的

さりげなく目と目で語る深い仲間
残業の深夜へむなしさふと湧きぬ
心とは逆に深みへ足が向く

同 翁童
同

であろうかと考えた末、医院入口に「可愛い文鳥君が遊びに来ています。早く迎えに来てやって下さい」と書いたピラを掲げることにした。ところが飼主は中々現われず、文鳥はますますなついてくれて、文鳥のいる暮しの快適さを感じるほどになり、九十歳の老母の良き友達にもなってくれました。そして三日目に、幼稚園で園児たちが小鳥を飼っていると聞いたので、そこであずかってもらうつもりで電話したところ、その文鳥が一羽逃げて園児たちが、がっかりしているところでした。このこと、まぐれ当りとはこのことか、愛すべき飼主のところへ真すぐに電話した結

一分間の柳論

一昨年胃潰瘍で入院した時、或る先輩から「川柳をしていて胃潰瘍などになつて」というお叱り、「この機会に名句を」というご注文をいただいた。なるほど物事を柳眼という第三の眼からみると、心にゆとりが生まれ、ストレスの解消になつて胃潰瘍にならないうことはよく分かる。しかしこの柳眼が問題で、柳眼にもメガネが必要な柳眼もあるであらう。そのメガネの役をしてくれるのが柳書であり、柳誌であり、そして川柳句集で、

題一山―七月二十日締切(九月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七七一

本田恵二朗

果となった。文鳥の仲間が三羽いる籠をさげて、ぞろぞろとお迎えがやって来た。
よかったなあと言ひ交しながら古巣へ帰ってもらったが、たった三日間のことながら、別れのつらさみたいな心境になったのは、私と家族たちである。これも奇しき縁の一つであらう。いずれ可愛い文鳥を求めて、家族の一員に加えたいものと思う昨今である。
文鳥にらめつこして日向縁
文鳥とわけのわからぬ対話する
文鳥のハミング真昼の夢誘う
文鳥になつかれ老母目を細め
文鳥と暮した三日をなつかしみ

川口弘生

そのサンプル的なものとして川柳塔誌の「座右の句」があると思う。私の場合、そのメガネをかけられないまま、胃潰瘍になつてしまつたが、それでも平均より早く退院できたのは、川柳のお陰とよこんでいる。ご注文の名句の方は路郎師によると「人間へ締め木をあてて絞ると……出る由だが、仏教にも他力本願があるように、胃潰瘍患者には、多くの先輩に接しつゝ「名句は作るものに非ず、生まれるものなり」と待つ手もあるようである。

大 萬 川 柳

「ナイフ」

善人の手だとナイフも知っている
大阪 小松園
東大阪 弥 生

一瞬の殺意ナイフと震えている
大阪 あいき

母の目にジャックナイフは凶器
大阪 君子

倦怠期果実ナイフが錆びている
東大阪 清 人

花婿の方がふるえていたナイフ
大阪 一 栄

護身用の女のナイフ錆びている
倉敷 梁 水

鉛筆よさらば電化へ去るナイフ
宝塚 静 馬

となりの通りナイフの順をまらぬ
板井 雀踊子

光ってるからナイフにある恐怖
大阪 緑 水

果実剥くだけのナイフにある平和
富田林 美 代

心ない旅のナイフに木のおびえ
大田 軒太楼

血を吸ったナイフの蔭に女あり

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百十四句
入選 四十六句

ぶきつちよを笑われまいとナイフ
倉敷 克 枝

突き刺したナイフ抜かぬのも女
大阪 弘 生

寡婦の胸にある日ナイフ突き刺さる
松原 重 人

ぶきつちよなナイフが妻を恋う飯場
堺 一二三

ナイフ落ちぶれて道具箱で錆び
門 真 鉄 児

惨劇を語らずナイフ錆びてゆき
神戸 どんたく

ナイフ右ホーク左にかしこまり
大阪 濁 水

このナイフ心の傷は切り取れず
大阪 駒 子

ナイフ上手に版画の手がびる
東大阪 三十四

ナイフより右手は箸を持ちたがり
橋本 木 魚

結び目へ業を煮やして切るナイフ
平田 代仕男

鉛筆を削るナイフが出す個性
名古屋 弘 志

大 阪 十 止 庵
新刊の香りに弾む紙ナイフ
岡山 品 充

不細工な奴だとナイフが笑いそう
堺 真 沙 子

書留にペーパーナイフの慎重さ
倉敷 白 水

宿命のなまくらナイフ研ぎつつけ
松原 史 好

ナイフ持つあそび少年愛に飢え
神 戸 牧 人

足音へ嫉妬のナイフとぎすます
富田林 花 梢

スランプのパレットナイフ錆びる
西宮 百 酒

あるときはアニマルの匂いナイフ
鳥 根 芳 子

リングむくナイフに童話のせて
大阪 新 之 助

炊飯へ登山ナイフが忙がしい
対話のない朝餉と重いバターナイフ
堺 一二三

ピフテキの筋に足踏みするナイフ
児の背丈け母の期待を彫るナイフ
鳥 取 豊 生

犯罪のナイフになった不倖せ
リングむくナイフ巧みに話題変え
大阪 一 栄

ケーキ切るナイフ嬉しい手を重ね
佳 句

対話のない朝餉と重いバターナイフ
堺 一二三

児の背丈け母の期待を彫るナイフ
鳥 取 豊 生

リングむくナイフ巧みに話題変え
大阪 一 栄

サラリーを妻のナイフで調理され
ライバルへ心の中で研ぐナイフ
人ノ句

また借りのナイフが廻るパスの旅
堺 真 沙 子

地ノ句
倉敷 扇 水

鑑識が持てばナイフが喋り出す
天ノ句
倉敷 翁 童

絆たつナイフの欲しいと思う日も
選者吟

メインテンプルナイフの音にも気を使
寸 評

一、ナイフという課題は想像通り
ねらい所が同じになり、幾つかに分類出来る程同様の句が多かった。それ等の句は句意の深淺、表現の巧拙に依って入選と没に分れた。

一、「観客が身震いしているナイフ投げ」と大分考えられた句が三句程あったが、報告だけで終ったのが惜しい。

一、「一切札の裏のナイフが錆びている」ひっかかりそうだが私は抜かなかった。こんな句も数句あった。

一、ご覧の通りベストテンは混戦激戦です。後半の競り合いがたのしみです。

昭和四十八年度

ベストテン (五月現在)

七	六	五	四	三	二	一
花	醉	吸	史	弥	一	克
梢	夢	江	好	榮	生	枝
二、五	二、〇	二、〇	二、〇	二、〇	九、五	九、〇
富田林	香川	藤井寺	松原	東大阪	大阪	倉敷

九	八	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	一	二	三	四	五	六	七	八	九
梁	文	弥	白	真	芳	翁	好	童	一
秋	三	三	水	沙	子	子	童	子	童
八、五	八、五	八、五	七、五						
倉敷	大阪	堺	富田林	堺	鳥根	倉敷	倉敷	倉敷	大阪

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
七	八	九	〇	一	二	三	四	五	六
智	静	美	里	本	扇	清	牧	智	司
馬	代	代	代	代	代	代	代	代	代
六、〇									
倉敷	奈良								

昭和四十八年度第八回
「体験」五句以内
締切 七月二十日

第九回
「かけ持ち」五句以内
締切 八月二十日

投稿先
堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三方 大萬川柳係

倉吉市制二十周年記念

第三回交通安全

山陰川柳大会

日時 七月十五日(日) 午前十時から
場所 倉吉市葵町市役所横々老人福祉セン
ター三階

主催 倉吉打吹川柳会(会長奥谷弘朗) 参加川柳会及び代表者(川柳塔関係) 鳥取川柳会・河村日満。日本海川柳友の会・森田若人。赤碕川柳会・森田布堂。川柳塔まっえ・岡崎祥月。むらくも川柳会・藤井明朗。いづも川柳会・尼緑之助。打吹川柳会・奥谷弘朗
特別課題「交通安全」一人三句以内
兼題 「やる気」「物価」「慾」「ハンド
ル」「美人」各題三句以内
席題 当日四題発表の予定
会費 出席者五百円(記念品と発表誌) 投
句締切 出だけの方は二百円(発表誌呈)
特別課題と兼題は全員七月五日必
着。タテ二〇センチ、ヨコ四センチ
の句せん使用。裏面に雅号又は氏名
柳会 奥谷弘朗宛

川柳平安二〇〇号記念

誌上川柳大会 作品募集

○応募要領雑詠(未発表句) 10句以内。選者一人に2句あてとし選者5人を投句者が指定すること。各選者へ同一句の出句は不可。投句用紙は選者ごとに原稿用紙半截型に作品2句と指定選者(番号で可)府県名と姓名付記。投句料無料、発表誌(10月号)希望は一五〇円(切手可)倍大号(11月号)と共に希望するときは二五〇円同封。
○しめきり 七月末日必着。

○あて先 〒六〇四京都市中京区姉小路通柳馬場西入平安川柳社誌上大会係(応募封筒に必ず誌上大会と明記)
○選者 ①直江武骨 ②斉藤大雄 ③後藤閑人 ④襦部鈴波 ⑤佐藤正敏 ⑥長谷川鮮山 ⑦野口北羊 ⑧大野風柳 ⑨山田良行 ⑩福永清造 ⑪河野春三 ⑫中島生々庵 ⑬近江砂人 ⑭鈴木九葉 ⑮三条東洋樹 ⑯大森風来子 ⑰石原伯峯 ⑱吉岡竜城。

○発表 10月号。各選者ごとの優秀作3句に呈賞。

○選句方法 応募作品は句箋に清記のうえ指定選者に送付する無記名選とする。

七月の句会

▼南海川柳会 十九日(木) 午後六時
題「立往生」「世間知らず」「鈍感」

通信にご投句に

川柳塔柳箋
一冊七〇円 送料 七〇円

会場 南海電鉄本社食堂内

▼南大阪川柳会 二十日(金) 午後六時。
題「欲」「SL」「小さい」「裸」
会場 松崎町二丁目以和貴荘。

▼川柳東大阪 二十八日(土) 午後六時。
題「鉛」「刺がす」「投げやり」「タイプ」
席題二題(当日発表)

会費百五十円(投句のみは投句料百円)

会場 東大阪市中央公民館第二集会所二階。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

▼生々庵主幹は尼録之助氏句碑除幕、たましま川柳会という強行スケジュールだった。

▼麻生度乃先生は六月三日、西尾葉氏と菊沢小松園氏の訪問を受け大いによろこばれた。血色もよくお元氣だったと両氏も安心されていた。

▼石曾根民郎氏(松本市川柳会)は全国の柳誌五万点を市立図書館へ寄贈され「川柳コーナー」を設け利用者の便をはかることになった。

▼平安五月号「第3雑詠開花のために」で、若山大介氏は「雑詠欄の選者は作品を選ずるといふより作品との対決」片柳哲郎氏は「投稿作品の否定に対する権限を持つものではな、投稿作家の自ら気づかぬ見稿素質を抽出し、スポットライトを当てる一担当者」寺

尾俊平氏は「あすに向って歩いている市民としての生活の吹やきと、思想の奥にすむ自己発見の作品の抽出を前提として、伝達可能の作品に挑戦」泉淳夫氏は「改めて竹二を目標として、現代に悩む作家たちと新しい美の展開に責を果したい」堀豊次氏は「作品というものは作者名を伏せて評価が公平でなければならぬ」というのが一般論であるが、それを越えての創作欄の場も許されねばならない。

▼ジャーナル五月号は俳句と短歌人からのエッセイを載せ、芳味氏は川柳部落の仲間だけのやり合いでは進展がないからつづけると。

▼時の川柳五月号で東洋樹氏の持っていた五十銭銀貨十万円円で売れた話から価値感に及び、伝承川柳も前衛川柳もそれを取り囲む人の価値感が違うのだから面白い。当分柳界は君は君、僕は僕のお互の信念を持って歩くより仕方がない。

▼ふあうすと社の住居標示変わる。653神戸市長田区五位池町一丁目三番一号増井不二也方。

▼丹波川柳社(小西無鬼主宰本社参事)が四月八日開いた、大木枝葉夫妻、松本よしの夫妻結婚受賀祝賀句会は晴天に恵まれて盛会。▼わかまつ主幹山上千太郎氏の健康上の理由もあって、新たに伊藤茶仏氏(川柳塔社参事)が選出された。

▼東野大八氏(美濃加茂市)は柳宴六月号へ「テレビで見た川柳史探訪」と題して書いておられる。製作者岸本吟一さんには心からなる敬意を表するにやぶさではない。と賞揚しておられる。氏が「川雑」時代に「柄井八右衛門」の一文を書かれたのは、戸田古方氏の「川柳映画の可能と困難」の一文を読んだので反応のようであった。

▼打吹川柳会(鳥取)は横網琴校の出身校成徳小学校百周年記念に席題「琴校」渡辺善句選「二十三句を倉吉新聞に発表。琴校大器晩成とも言われ——弘朗。

▼番傘創立六十五周年記念東北川柳大会が五月五日福島県市民館で開かれ福会。番傘川柳社製作文化映画「川柳史探訪」約五分が上映された。

▼さっぽろ五月号特集「三十代作家はかたる」で三人の若手作家の意見がのべらかかって同年代に交わらな疑問や方向とあまり感じないよう中年文学入りの挨拶状の感。

▼思潮四月号で「上手」と「うまい」について十二名の同人の答えがだされている。「上手」は表面的な巧みさ「うまい」は内面的な味わい等に分れている。

▼番傘「港」が小田野直武の表紙絵で新装なって発売。

▼川柳えんぴつ五月号で西田自然人は、立派な作品でも不まじめな雅号では作品が汚がされる。雅号をもつと大切に。

▼高橋放浪児氏(川柳北上主幹)の川柳句碑が四九年四月に建つ。一口千円の募金。申込所は北上市本通り二五。申込所は北上市本通り二五。申込所は北上市本通り二五。申込所は北上市本通り二五。

▼高知春季川柳大会は四月二十二日開かれ、参加者八十三名の盛会。知事賞は宮本晴彦氏。

▼愛生園の島洋介氏の句集「白い杖」が出版され、四月八日記念祝賀大会が盛大

▼ふあうすと賞「優秀作」遍歴止む真つ直ぐ冬の相に陥つーほか(高木千寿丸)佳作ー出産の電話とかかぬ冬の耳ーほか(安藤まさ子) 同一豊紙解く女は遠い日を憶えーほか(窪田久美子)

▼紋太賞「優秀作」刺製に冬がとまって動けないーほか(伊東静夢) 佳作ー冬の乳房がキンキンとなる人にくむーほか(前田芙巳代) 同一落葉たく長い歴史を持つ夫婦ーほか(阿部吉春) に行われた。

▼第二十五回西日本川柳大会は九月九日に開催決定。紋土の表紙が水粉千翁氏の柳画で飾られることになった。

▼瓦版五月号で反省氏が俳句的な川柳、川柳的な俳句、詩的な川柳、これからは整理するべき時期。マスコミから川柳が軽視される理由の一つに、人間関係誌の編集に終始しているのが一因。柳界の統合は無理としても川柳統合誌の発行が決断されてもよいのではないかと。

▼番傘わかくさ三百号達成記念会が四月十五日開かれ、百五十余名の参加者に急きよ会場を変更するほどの盛会。

▼いずも川柳会（尼緑之助主宰）の竹内李朋氏が句碑建立後五月二十一日逝去。病魔につきまといわれ四十七歳の生涯だった。

▼島田兼孝氏（大洲市・愛媛県薬剤師会長）から生々庵主幹に「先きに藍綬褒章並に叙勲の光栄に浴した時、祝吟を頂戴しているの

で、それなどを記念に句集を出したいと思っています」大阪の桃谷順天館で働いていた頃、路郎、水府、南北さんらと語ったことが懐しく思い出されます。

▼藤村涼子さん（アメリカ）は五月九日薫風氏に伴われ本社訪問、夜は生々庵、小石ご夫妻の本宅で一泊、主幹ご夫妻の訪米当時の話に花が咲き楽しい一夜をすごされた。

新同人紹介

藤田 頂留子

一三夫・奈良子推薦

▼同人の動向▲

▼若本多久志氏は「けいさつ」の友「四月二十五日号」「川柳漫筆」を執筆、五月二十五日号にも続篇を発表。柳人社長らしく交通違反をテーマにしたもので警察官に好評。

▼菊沢小松園氏は秋の大阪市文化祭川柳大会の打ち合わせに（六月十二日中央公会堂地下室）出席された。開催日十一月十一日（日）。

▼川村好郎氏は五月三十一日堺商工会議所のロータリークラブ例会に同窓の高木幸太郎氏の紹介で「川柳について」を講演、好評だった。

▼小西無鬼氏（兵庫県）は永尾英断氏と緑之助氏の句碑建立川柳大会へ出席、久しぶりに皆さんへ会えて、満悦だった。なお近く「ささやま」の例会で「川柳塔篠山支部」を宣言の予定とのこと。

▼黒川紫香氏（尼崎市）は小学校時代からの親友である水谷、潮花氏らと毎月どこかへハイクしていること。

▼橋高薫風氏（豊中市）は紋土五月号（生命を詠むあたりがたさ）を執筆。氏の二十代の軌跡を語るもので好読み物。

▼植村客遊子氏（兵庫県）は加古川気動車区勤務になった。兵庫県加古市川町溝ノ口一丁目、国鉄宿舎三号。

▼出原敬一氏（岡山県）は初孫紗織ちゃんを得られ、よろこび「小羊の匂いする初孫しかと抱く」敬一。白汀氏の一時間の柳論は勇気ある貴重なご意見だと思われました。

▼小野克枝さんと川端柳子さんは岡山県文学選奨四十七年度に作品が収録された。

▼原独仙氏（出雲市）から薫風編集長へ緑之助氏句碑除幕式へ大挙出席の謝辞が送られ、路郎忌への出席を考慮中と「嫁つた娘のよう考へ想いを碑へ馳せる。」

▼羽原静歩氏（守口市）は

五月二十一日から町内会懇親旅行で尾道、耕三寺、後楽園と旅行された。

▼福島鉄児氏（門真市）から体のほうは好調ですが耳鳴りのため耳鼻科へ通院していただきます。

▼山田季賛氏（高槻市）相変らずの安静ベッドですが「古方句集」を楽しく読んでいます。五月十日に蛙のように腹へ空気を入れ、三カ所少し切りました。

▼河村日滿氏（鳥取市）同人句集「川柳塔」と決まり「私注」以来のことです。大井正夫さんの連絡で撫順時代の福井天弓さんと総社時代の雪井荘で会い、その時代の私の句に接しなつかしく思いました。「文久さんと鶏牛をしたが、久良伎さんの色紙を二枚も持ちながら差し上げるにはまだ欲があり、仕掛人にシゲキされて句会吟を作りました。

▼藤井明朗氏（島根県）は木次町のことぶき大学（おとしより）で川柳講座の講師として、川柳の作り方を今後は川柳教室を開く由

▼八木摩太郎氏（堺市）は

農協を通じて「医者稼業の川柳」と「患者の眼に映ゆる医師」を詠んだ川柳を配布、好評。なお旅行に配るの社参、京都、大和方面の古社探訪に楽しんでおられる。また六月六日には北海道へ吉岡清香夫妻、共々万子遊された。

▼飯田悦郎氏（八尾市）が七月七日の二賞発表句会に出席を照めてくださった（別項参照）のオリビア氏と心齋橋のその日一三夫氏の間で「仕掛人三人が三時

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほか5ミリ錠

☆食後すぐのむのが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



本社六月句会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

雨バラバラとくれば幹事ハラハラするところだが、おかげで傘のいらぬ六月句会は盛会にしていた。

菊沢小松園氏は資料を調べての柳話で登場された。

東京のある大学の入試問題に出た、歌舞伎の演題をともに読める学生が少なかった話から、木賊刈の芝居で菊五郎が観客が思わず発した「危い」という言葉で、鎌の使い方が間違っていたことを知って更めた芸熱心なことから、「凡夫の言も聞くべき」こと。壬申の乱の頃の皇族間の婚姻が乱脈であったので、戦前はあまり知らされていなかった。

講演を頼みに行った学生が、お世辞のつもりで、「枯木も山の賑わいですから」といって断わられた。現在の大学生の物の知らなさ

を話され、会場を洪笑の渦に巻きこんだ。六月句会の月間賞杯は名花宮西弥生さんの佳句に輝く。

(新之助)

——河井庸佑整理

出席—与呂志・新之助・浩輔・葵水・小松園・柳志・静馬・生々庵・文秋・一三夫・太

茂津・喜風・素郎・滋雀・肖二・綾女・いわを・古方・一舟・正彰・柳宏子・花梢・百酒・緑水・雀踊子・好一・幸太郎・三十四・茂男・栞・瓢太・悦郎・鶴声・敏・野迷路・トク子・儀一・一二三・俊夫・いさむ・美幸・牧人・金三・重人・吸江・凡九郎・好郎・葛城・維久子・岳人・静歩・あいき・君子・鬼遊・庸佑・弥生・形水・史好・酔々・薰風・葉子。

席題「紙くず」

岩本雀踊子選

紙くずの中から猫がむくり起き 葛城
ゴミ戦争この紙くずも参加する 一三夫
捨てるにも持つも邪魔な選挙ピラ 好一
紙くずの中で乙女の恋育ち 君子
新聞紙貯めて結局くずにされ 喜風
紙くずを捨てるホームの長いこと 浩輔
紙くずの中に埋れた善意 柳志
紙くずを燃やし社会奉仕という煙 小松園
紙くずへ母もたいないもたいない 重人
紙くずが今日の人出をものがたる 失名
紙くずにしたと思う日の手紙 悦郎
紙くずのここにも産業スパイの目 重人
紙くずとなり落選のピラを踏む 牧人
紙くずの舞うにまかせた負けいくさ 柳宏子
紙くずの中で生まれた直木賞 一三夫
紙くずの中に駄作が泣いている トク子
紙くずの中で二浪は夢抱く トク子
紙くずとなる履歴書にあった夢 花梢
造花色褪せても紙くずにならぬ意地 葵水
紙くず籠恋の犯人つきとめる 維久子

席題「先手」

西 いわを選

週刊誌紙くずとなる駅に着き 新之助
紙くずになる広告の案を練り 葵水
千金の夢紙くずとなつて舞い 美幸
紙くず程金がたまればなと思ひ 文秋
たしかめて女は紙を丸めたり 岳人
紙くずの中で世相を知るくず屋 鶴声
過ぎたるには及ばず包装紙の愚知も 小松園
決心がつき紙くずとして丸め 生々庵
紙くずを拾う暮しの詩がある 雀踊子

仲介の先手を打った電話口 維久子
公害も先手は派手な記事になり 小松園
陣頭の社長へ先手の息が切れ 静歩
気がつけば売りの先手が打たれてた 野迷路
ライバルに先手とられている企画 酔々
先手打って置いて煙草の輪でとほけ 一二三
公害に先手を打てる能がない 新之助
金がもの言う先手なり負けておき 一三夫
先手必勝度胸を決めた嘘をつく 滋雀
顔を見た途端パチリとする先手 酔々
本論にはいらぬ先に断られ 柳志
父親に先手を持たず将棋盤 静馬
先輩をたてて黒とり先手とる 庸佑
ライバルが一足先にプレゼント あいき
其の先を読まれて先手うらたえる 重人
先手をとられて無口になる勝気 重人
一足違いで先手うたれた角の家 雀踊子
家計簿にボーナス先手取られたり 金三
贈賄の先手も後手もひっぱられ 重人
泣きごとを言われ借金切り出せ 儀一

叱られぬうちに先手の詫を入れ
勝運にのる先制のホームラン
肩をもむ孫の先手にしてやら
窓からの荷物で先手取った席
徹夜した先手が毛布で順を待ち
自動扉先手を取ったように開き
神様を引張り出して来た先手

席題「土地」

神谷凡九郎選

土地買った家も建てたとケチくさい
団地建って建てた土地柄かえられる
無関心土地の値段も聞いておく
奈落から天の天までの権利書か
土地を買う話墓地のことだった
昨日までベンベン草の土地でした
安住の土地を売られた野の仏
墓地分譲地獄の土地も前払い
それやさかいに土地は持ちとら
土地勘がうっかり逃げた袋小路
土地つ子的みどりが今日も削られる
生き行く土地にしみる僕の汗
土地ものにまぶしい彩となる噂
土地相場宙で知ってる二階借り
田舎には土地があります2DK
公園の土地ベランダの植木鉢
土地確保木材高騰家放棄
土地権のない焼け跡へボツと付
街路樹のギブスのような土地に耐え

兼題「リボン」

高杉 鬼遊選

妻の指素直にリボン花にする
祥月

リボンの倅せ新婦の花に添い
アルバムにお下げにリボンの母が
ケルキ切る重ねた手からリボン揺れ
リボンまだ取れず夏まで続くスト
主婦連のリボン小さな我執持つ
児の晴着リボンをつけて出来上り
団体のリボンひとりがるうろし
リボン花うす紫は亡母の色
ピアノ弾くりボンの少女のつぶな瞳
きつね雨二人へリボンかけて去る
黒リボンを結ぶ水俣の怒り
匿名で来た花束にあるリボン
葬儀委員のリボン忘れたまま帰り
山語る男にリボンのない勲章
大きなリボンだから候補者だろう
貰われる子猫へリボン着けてやり

リボンひらひら農協サマのお通りだ
洋服もリボンも揃い双生児
ひとりきりになって泣き喪のリボン
母の日の母へお茶目なリボン掛け
地球儀へ喪章誰の手でつける
リボン儀いろん変えて市長は動き
片言のリボンがしゃべる三面鏡
胸リボンつけて香奠もらう役
愛絶頂リボンと鈴が邪魔な猫
野辺送り喪章が舞うか黒揚羽
冷房が効いていますというリボン
リボンつけければ美少女になつてくる
華やかに結ぶリボンは寡婦の掌で
黒いリボン息子犬死かも死れず
夢二描く結びリボンは小紫
ひつつけば蠅の喪章となるリボン

好一人
牧人
浩敏
いさむ
浩輔
いわを
太茂津
太茂津
太茂津
太茂津
古方
古方
静歩
静歩
牧人
太茂津
古方
古方
新之助
雀踊子
葵水
一二三
いわを
与呂志
敏
一三夫
君子

芳子
静馬
綾女
日満
静歩
庸敏
トク子
金三
美幸
野迷路
儀一
生々庵
岳人
三十四
葛城

俊夫
幸太郎
好郎
形水
一二三
花梢
柳宏子
太茂津
柳宏子
葵水
新之助
雀踊子
古方
古方

雅号ぶつちやけばなし (116)



清水 一保

しみず

いっほ

「いっほ、いっほ」と盛んに使用される昨今、川柳を始めて二十六、七年、最初三文雑誌に投句してそれが活字となったのが事の始め、本名の保(たもつ)に一の字を加えただけのあまり立派とはいえぬ呼び名で一時頃は「いっほ」の文字を一步或は一甫に改めようかと考えた事も有ったが、然しそんな事よりも大切な我が人生に意義有る川柳活動に生命の有る価値有る句へと「いっほ、いっほ」歩み進む事を念願して今日に至って居ります。

雅号と云っても近頃本名同様となり、川柳にかかわりない人よりも

(農・四十七歳)

新同人紹介

〒701-42 岡山県邑久郡邑久町真徳

嘉数千代香

〒699-13 久志良・栗・小松園推薦

島根県大原郡木次町八日市二六〇番地

神原秀子

〒699-13 島根県大原郡木次町八番地

梅 原 秀 子

みどり

〒574 大阪府大東市三住町九番一十号

栗・明朝・白汀推薦

土井浩輔

小松園・雀踊子推薦

トランペット黒いリボンをまた泣き

少女へのリボン少年つけてやる 酔々

特選の黒いリボンは生きている 一三夫

紫のリボンつければ貧しいか 葉子

白いリボンの少女を描いた五月の絵 牧人

菊燦然黒いリボンが泣いている 鬼遊

兼題「泡」

山本 素郎運

初恋をビールの泡がしゃべり出し 維久子

泡食ったのは叩かれた方でなし 芳子

無から無を追うかけている水の泡 祥月

税務署の手違いやけど泡をくい 日満

泡沫のごとくタレント浮いて消え どんたく

泡になる話も上手に聞ける地位 与呂志

シャボン玉冒險薫る風に乗る 酔々

水泡に帰したが努力は認められ 章雅

海底のドラマは泡を忘れてず 浩輔

明日食べる蟹の泡にも虹がわき 美幸

一瞬のいのちに滝の泡さわぐ 文秋

点滴の泡へ言葉も無い祈り 小松園

黒い泡瀕死の川の叫びとも 太茂津

滝壺の泡消ゆることなく溢れ いわを

泡の立ちようで出来損いの菓子 幸太郎

口角泡とばす団交に裏があり 柳宏子

西洋風呂泡に浸っているみたい 金三

肝心のところは泡で隠してる 飄太

泡吹いて蟹は売られた身を知らず 静馬

鼻にアワつけて一気に干すジョッキ 新之助

洗剤の泡も抗議に盛りあがり 百酒

伝説の浜をへドロの泡で消し 葉子

労働の汗と溶け合う泡の彩 雀踊子

ふん切りのつかぬビールの泡が消え 俊夫

すぐ消える泡残る泡そんな悲喜 雀踊子

洗濯の泡へ幸せふくらませ 好郎

角さんならの期待も水の泡 雀踊子

水草の呼吸か小さな泡が立つ 一三夫

沼すでに不倫をのんだ泡を吹き 素晴しい話

素晴しい話は泡のように消え 弘生

シャボン玉電線越えたのも消える 好郎

金で買えぬ経験でした水の泡 肖二

口角の泡をポカンと見ては酔い あいき

泡なめただけのビールに妻は酔い 滋雀

乾杯へこぼれる泡が待ち切れず 葉子

掌の中の泡が童話となつてくる 素郎

うたかたの恋つづりつつ女老け 芳子

兼題「好奇心」

戸田 古方選

伸びてゆく知恵へ叱れぬ好奇心

節穴が日頃の行儀忘れさせ

買うほどのこともなかった週刊誌

分別がブレイキかけける好奇心

ええとこに節穴あった好奇心

好奇心もあったと若すぎた恋すなお

好奇心だけとは言えぬ宝籤

腰さすりさすり背のびの好奇心

スタートにあつたら人気も好奇心

叩き屋におちくらられてる好奇心

好奇心心人の世界が腑に落ちず

緑水

花梢

柳志

花梢

好奇心だんだん法に触れてくる
 長女二女妻に似てきた好奇心
 野次馬の中の一人が喋り出し
 好奇心ある方が先に目をそらし
 好奇心河でも見てやろう旅をする
 好奇心お人形さんを裸にし
 一人が二人ふたりが三人にも好奇心
 らつきょうの皮を芯までむいてみる
 虫の穴から虫が出て来た好奇心
 好奇心今日は曲った道をゆく
 好奇心さえ磨り減らされている生命
 けつたいなけつたいな好奇心が育ち

兼題「揺れる」 川村 好郎選

揺れるにも法則がある藤の棚
 理性の芽揺れる心をたしなめる
 口紅でころの揺れは隠されず
 心の揺れ鎮まってる椅子の冷え
 札束に人間揺れる弱さ持ち
 女心といっしょに揺れるひとなか
 言葉尻とって国会揺れに揺れ
 感情の揺れに愛という手綱
 明日生きる手段へ糞虫揺れている
 白む頃やと妥結へ揺れが止み
 道義地に墮ちたモラルへ揺れる葦
 取り沙汰へその真実が揺れてくる
 揺れ動く地球ふんばる細い脚
 機微衝いておんなごろの揺れを待つ
 そっとして欲しい揺れているころ
 プランコの揺れに任かした恋の詩
 揺れたことちよっともいわぬ空の旅

俊夫 素郎 岳人 茂男 牧水 静馬 醉々 悦郎 緑水 凡九郎 古方
 頂留子 維久子 小松園 生々庵 文秋 葉子 柳宏子 逸三 維久子 一三夫 花梢 あいき 太茂津 幸太郎 滋雀 浩輔

写経に坐るその筆先きに揺れる業
 肥料代も出ぬ稲まもる案山子揺れ
 漁火が揺れ鶴に哀し夜が続く
 馬耳東風心の中は揺れては眺め
 旅愁いまほのかに揺れる灯を眺め
 寡婦として生きる灯りが揺れてくる
 イヤリング聞き捨てならぬこと揺れ
 パス揺れて揺れて政治に遠い村
 捧げては女ころの揺れ止まず
 ビル建ててから会社揺れはじめ

生々庵 俊夫 一三夫 花梢 緑水 小松園 花梢 小松園 俊夫 弥生 好郎

川柳塔社常任理事会 (六月八日)

議題は同人句集「川柳塔」一本にしぼられた。印刷所の交渉は柴副主幹(選参のため一三夫から説明)。出来得るかぎり安く、良く

雅号ぶつちやげばなし (117)

こちよう



胡蝶 烟 濱

はまばた

昭和十六年頃、つまり私が今は亡き先輩の橋本緑雨氏や加藤ライト氏に師事して川柳を始めた頃に遡ります。生気にも初めから雅号が欲しくてならず、先輩達に相談しました。お前はちよこちよこしているからちよこをもじったこちよう(胡蝶)にしたらとすすめられ決まったものです。その頃は若かったし市電の少年車掌をしていた私は、美人でも乗って来ようものならそわそわちよこちよこしたのを先輩達はきつと御存知だったのかも分りませんが、よく顔に不似合いの雅号だと悪友達は冷やかしますが、別に気にもならず相も交らずちよこちよこした毎日です。

大阪市交通局地下鉄職員(五十歳)

をモットーにしているが、これらの情報は直接各同人諸氏へお知らせすることになってい。 (この反響の大きさに常任理事会は責任の重大さを各自に感じた。)

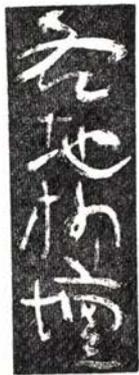
出席 生々庵・柳志・静馬・葵水・古方・小松園・一三夫諸氏。(以和貴荘四階ロビー)

▼同人の動向▲

▼西のむを氏(藤井寺市)は五月二十五日に生駒の霞乃先生を訪ねられた。

▼橋高薫風氏は母堂と二度目の四国遍路へ行き本社句会の八日に帰阪、出席。親孝行をつつ小川られている。

▼小川静観堂氏(伊丹市)のご招待で、編集部 部の薫風・新之助・葉子・一三夫諸氏が六月十日、大阪池田の伏尾温泉「不死王閣」で鮎料理に舌つづみを打ち、柳談、酒談、もろもろの談話時間、楽しい半日を過ぎられた。



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳さざやま

河原みのる報

骨肉を喰ひ生存にてらいなし ゆきお
勘当をしてても父の息は待ち 越山
肉身に明かせず他人に心告げ 枝葉
指先でつづいてみたい子のエクボ をさむ
笑くばもう用をなさない年令を知る みのる
えくばからすんなり刺のある言葉 初音
女中さんのえくば真ん中に写し 可住
永遠の別れと知らぬ児のえくば 蜻蛉
この女に嘘は云えないいいエクボ 無聖
十八えくば課長を翻弄し 百合子
えくばの児笑っていてもおこつても 八陣

千兩のえくばも所詮ひとの花 近水
散り急ぐ花の命を猪口に受け 紫江
春の田へ出すのが惜しい灘帰り 宗珠
間違ひへ赤エンピツは容跡せず とおる
青空にわらび忍従のこぶし上げ 雅佐女

川柳大阪

児島与呂志報

責任のない行動がかき廻し 戸無
花便り孫に見せたい事もふれ 胡蝶
スクーフを振って港に涙あり 至峰

かげろうが追いかけている花だより 重人
佳い便り待つとホーム見送られ 六童子
男女同権 盃見事に干す女 秀峰
転居先便り片手にやって来た 洛敏
四十坂丸みのとれた人となり 醉
ギブエンドテイクの賽銭はずみず 楽々
歳老いて日々さいさいの無事を知り 武松
肩書があつて丸懐にしてくれず 誓二
金盃を手に恍惚の人黙す 本蔭棒
出稼ぎの便り温める若い妻 徹舟
ボルノ館歳を忘れた笑いが出 三十四
大ジョッキ揚げてスクーフ気炎あげ 徳松
大盃へ一升瓶の音で酌ぎ 笑風
責任になれば難壇右往左往 呑歩利
責任が同年配を老いこませ 漁人
夕景のさざ波ふたりを竹ずませ 与呂志

川柳塔まつえ

祥月報

ランドセル鳴らして靴が駆けてくる 青湖
父の靴一本足の音がある 酔歩
のんびりともぐらが散歩する空地 鉄花人
靴音が鳴る晴れきつた朝の空地 澄水
団地の空地玉葱二つ生きており 河南
靴音も父に似てると笑い合ひ 英子
ふるさとの土しかと踏む靴の音 芳子
細い目で笑ひ声色酌ぎこぼし 大鳥
パーゲンに豆腐溜め出来もせぜ 正朗
金借りて買ったパーゲン品の庇 独仙
建国の日に反対したけど有難い 鶴丸
長寿の父で旗日を忘れない 孤呂二
十六文靴も大なり音も大 通児
声色が父にそっくり子の育ち 叮紅

国旗を立てるのも忘れた平和 兎男
天性の咽喉声色も堂に入り 緑之助
靴音も端唄もたしか父帰える 紫吻
地球の空地砂漠に幅がある 天痴人
旗日ない職今日も頭刈る 祥月

堺・若芽合同句会(堺市)和海草春報

感情の起伏の紅が濃ゆすぎる 美代
悪人正機とは仏の教えありがたし 誓二
ワキ役は悪人の名で覚えられ 茂美
悪人にしては往生悪すぎる 摩太郎
頭からなめた我流に歯が立たず 儀一
人生に我流の通る道もあり 藤持
我流とは言うが不思議な血を感じ 青香
師につけば無口になっている 我流
二浪してもよかったねと御赤飯 千万子
入学のお礼を文珠忘れられ 笑痴
落付けぬ母親となる入学期 宏馬
不合格のショックを母が引受ける 静馬
脊信のショック唇こごえてる 葵水
気が強いだけにこたえてんじョック つき子
春斗に勝つたがしョック社がつぶれ 一舟
別居してからは寝付きの悪い人に 南柳
別居して嫁のあくびも派手には孫娘 徳子
別居して嫁のあくびも派手には孫娘 清女
お互いに別居してから見直され 天笑
別居してからは月経狂いがち 小松園

菜の花、和歌山、新宮合同句会 悦郎報

十人も産んで老後を一人住み あいき
十戒を破ればどこかで笑う声 酔夢
十雨に落ち執念の男泣き 多久志
ネックレス十字架揺れて信じて 太茂津

跳び箱の乳房はすでに女なり
 体操すんで女子体操にむけたまどし
 カメラの目女子体操にむけたまどし
 久々の体操ふけたなと思ひ
 体操で鍛えた娘の曲線美
 鶴の来る土は政治に遠くあり
 お目出度の主役と鶴は知らぬこと
 動物園に野性の羽根がない
 鶴亀算弱い頭を悩ませ
 その城も実は鉄筋城下町
 城下町ビルとお城の背くらべ
 イメージの女は逆いな城下町
 城下町歴史は逆に廻らない
 城下町こんなところに突き当り
 大天狗天狗チームの和を乱し
 三代の手が和やかに雛飾る
 平和とは三度のめしに子が揃い
 ああ平和米の白さを選んで食ひ

鬼遊 摩天郎 葵水 富子 文幸 雀踊子 まさ子 凡九郎 武雄 弘生 小松園 牧人 要保 喜一郎

評判の牡丹は雨に散り急ぎ
 飛ぶことをやっマスター燕の子
 悪評に耐えて今宵も眉をひく
 子が戻る順に天ぶら覗きにき
 評判の店に涙と汗の過去
 天ぶらを山盛りにして子沢山
 売り上げをのぞいてマスター帰
 残りものみな天ぶらにして不意の客
 評判はどうであろうとマイペース
 評判は恐い老舗も閉じる破目
 マスターの立場でわが子叱るとき
 茶目っ気のあるマスターは親しまれ

美幸 美々 小松園 吸江 茂男 鬼遊 好郎 弥生 比呂路 保郎 悦郎

どんぐり川柳会

谷垣史好報

美しいママ マスターは隅にいる
 天ぶらを食べる無口がようしやべり
 評判もこれまでくれば鰯がつぎ
 好評と云い残品とは鶴がわづき
 評判になればマスターはとくかず
 好評に酔うて立場を踏み外し
 マスターの声が隅から首を出し

史好 真砂 喜風 儀一 凡生 長人

和歌山七面句会
 少年のかける巣箱に明日がある
 お菓子箱捨ててに惜しい美しさ
 美しく耐えて姑に気に入られ
 妻を抱いて才女昔の影もなし
 役立つ日思うて箱を捨てきれず
 警察に昔なかつた交通課
 花追うて蜂の巣箱は長い旅
 父の酒昔話に亡母が生き
 怪獣にむかしむかしが締めだされ
 兄嫁を只美しいと思う今日
 衣裳箱の数をふやして妻老いぬ
 美しいとは別な軒をきく今宵
 美しい心の人に妥協する

芳童 しずえ 淳和 清和 清三 陽一 政夫 和美 富次 勇治 三幸

駒つなぎ川柳会
 噴水に透かせば女神笑み給ひ
 後手々に回わる施策の空回わり
 観光地あの手この手で巻きあげる
 朝めしが硬い山小屋今日も霧
 女神いま変身したい人に逢い
 魔女ある日女神の額でさし招き
 酌み交す手つき甘える線でうけ
 それぞれの葉にそれぞれ虫が住み
 今日一日妻にも云えぬ空回わり

育園 いわを 小路 眉水 柳信 肖二 綾子 摩天郎

手のひらを女の嘘が逃げて行く
 坂道に雪で車は空回り
 南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
 裏町のひま人にデカ尾行され儀一
 裏町の常連にすの縄暖簾葵水
 裏町の二号当番うるさがり 摩天郎
 裏町に住んで停年来てしまひ 圭水
 裏町の父の余生を淋しがり 宏子
 裏町の人情捨犬太らせる 清女
 ステテコも居る裏町の夕涼み 柳信
 裏町で糊口をしのぐ母子家庭 誓二
 裏町の小銭ながらも屋台店 八郎
 オージェスケー川柳会 大坂形水報
 王手飛車指したとたんの得意顔 健坊
 自分からお手々を洗った得意顔 有一
 控え目が云った積りがあだとなり 川上
 控え目が割勘となり酔がさめ 鉄鯨
 人形使い動きひとつに血がかよい 鉄鯨

黄銅六角ボールナット
 及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
 TEL 06 3452-114
 夜間 06 4400 八

寝床でもしつかり握るウルトラマン
スクスクと育つ願いを武者人形
控え目に人生の坂黙々と
黒髪のところの写真に得意そう
控え目に買った馬券が当り券
お得意を人柄だけで引きつける
割勘でお得意のど聞かされる
いつのまにか人形にされていた美人
盲い子の手が人形に話しかけ
控え目を知らぬ若さがたのもしく

川柳たけはら 森井菁居報

彼と彼女私とはんだ三枚目
亭年二才生きてれば生きてれば
容貌をなげく娘に済まぬのみ
スタートライン貴方の手をしかと春
これからが本番大地踏みしめる
しろいものみははつこつにみえて
抜いていた白髪に負けて子が居ない
叱られてはんとは馬鹿になったよう
鯉のぼりうちにも居るぞ男の児
塗りたてのペンキが匂う待ちぼうけ
これという話もないが逢えば済み
年甲斐もなくおどらせて春の旅
漫才のまま一日が過ぎてゆく
税金を叩きつけたい黒い霧
反物を並べ母娘は春を撰り
執念のように真赤な落椿
ひつそりとファイトを燃やす茶が
筋道を通し恨みを買いは行く
やわらかな陽差し貴男と植える花
日本晴れ区切つて澗の崖青む

上田 神田 孝夫 聖地 一扇 博泉 千夢 亞成 好郎 形郎
蘭幸 静水 房水 笑子 文晴 不朽 政己 青己 菫居 鬼焼 雅鳳 貞子 一路 文詩 西明 扇水 淨美 葵水

そのへんはよく考えている気象台
らんごせるわたしもやっといちばん
森井いと

城北明朗句会 川口弘生報

一姫はよかつたが二太郎続かない
一個で足りる餅を妻が又も焼き
一べんは飛行機に乗りたい女達
一計を胸に抱いて怒らない
一札を入れて和解の膝を折り
一才児手を引く母の手ふり払い
会つてみて噂にまさせる紅一点
墓参り祖父一番に花を立て
一目惚したばかりの身の弱さ
つかれを癒す一パイのコップ酒
押花にし見舞つてくれた日を入れる
お詣りをすませば心はればれと

秀村 志津 独水 生仏 贊平

まるべに川柳会(大阪市) 村田瓢太報

会うてても他人の顔になつておき
花便り人の口から聞くばかり
不安さも徐々に消えゆく初春縫う
逢うもつらい逢わぬもつらい恋愛
春眠へ時差通勤も間に合わず
つぶれても名前を替えて立ち上り
五分咲きの語らいはずむ喫茶店
蔵王堂静を偲びて散り急ぎ
逢わねばよかつた初恋の人の老い

垂井葵水報 川柳わかやま

佳句地10選 (前月号から) 森井菁居選
乳房這う蟻に死刑の罪ありや
看護婦の白衣無菌のように見え
こと毎に出来る従兄弟の名を出され
人だかり呑気な人の中の僕
朝食を抜いても盆栽水をやり
エプロンを制服として城守る
借金も金蔓もなくミシン踏む
借金予報海に夫の居る路
恍惚の前兆やるか日を忘れ
日本海眺め心に冬がある
にぎりやのおやじにはでなその息子
手を握りゆくアベックへ明治の目
五ヶタにてOK労使手を握る
プロ意識ベレー帽子のかぶり方
握る手で愛の尺度を確める
握りつぶすことを覚えて管理職
鍵握る女波紋をおいてゆき
節くれの五指を影絵は気付かない
屑籠に山五線紙が引きさかれ
握手など知らない母の低い腰
歩み出し無限の道と知つたプロ
その徳は訪うこともない花の寺
手を握つたくらいそんなに大げさな
これ以外能がないのでプロでんね
仲人もプロかこまかく調べられ
五ツ目の怪談夏の涼み台
耐え抜いてめしより好きなプロで食

鬼遊 横地 清和 雀踊子 欣弥 若芽 貞子 春果 醉歩

みさお 綾女 千寿子 祥月 与史 大輪 武雄 白光子 十郎 好郎 葵水 富弘 裕美 竜 太茂津

会句忌郎路

日時 七月七日(土) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

あいさつ
閑話

兼題

「路欄傍」 菊 吉 中
「天籟才」 若 本 田 島
「タイトル」 西 尾 圭 生
「神酒」 中 島 井 堂 庵
各題三句以内厳守

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

8月の兼題 「洪泳」「滞く」「コイ」「ン約」

集

募

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 北川 春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「眼帯」 四方天 弘美 選
「列」 永藤 弥平 選
「杖」 小川 静観堂 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選
水煙抄(10句) 北川 春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「スポーツ」 草 深 醉 升 選
「へそくり」 森 田 布 堂 選
「社会面」 岡 村 久 志 良 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

前月号は28日に発送しました

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのにも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば橋本
大阪・東京・京都
高島屋

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料共)
一年分 二千四百円(送料共)

昭和四十八年 六月二十五日印刷
昭和四十八年 七月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 中島 蓬太郎
発行人

印刷所 太陽印刷株式会社
郵便番号 542

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★路郎はめぐりめぐると、まず「川雅」時代からの読者カードを数えてみて、その「財産」の減っていないことをたしかめると、ホッとすることになる。

★同人の数はそのまま柳社の力である。

★鳥居根のほとんどの同人は尾根之助氏のご尽力によ

るものであり、そのほか各地の旧不朽会員のベテラン諸氏がガツガツとめ、強い閉鎖のもと、同人を不動のものにしていくことになる。

★ほくも同人かの人を推薦してきたが、西氏が物故された方々も相当にあり、現在活躍されているのは二十六氏になった。六月現在、このなかには大物

工藤甲吉氏がおられる。★工藤甲吉氏は34年10月に不朽会員になっていたが、この人を口説き落とすには相当の日数を費したものである。東奥日報社の後ちの編集局長ともなればホイスれとはいかず、とくに氏は「巻頭句」という作家的意識をもやされ、それを「近作柳野」に魅力を感じてが、路郎達の「川柳塔」の配列が特別会員、

維持会員、普通会員の順とになっていて、一も一度「数冊」で巻頭を並べてからにしろ、ついでに「い」とちよつとお預けを貰ったことかと思

▼葉子コーナー

▼不二田様が「川柳家も変わったなア」とおっしゃるので「何がですか」と聞きましたら「当てるみの原稿など活字にする」と、八方かう安たたきにされたものだが、大家諸先輩からは正直でいいとはめられた。そうですが当て込みができたら一人前でしょうね。

れる。

★五月に推西した関美子さんは、十七、八年前は「す別女」と号し、高女出たてのお康さんだった。筆跡を見て文章の書ける人だと直感し、この人の大成を期待していたのに、いつのまにか、句を送ってこなくなっただ。ところが一年半ほど前に、氷見市の川柳大会で本誌を見てほくの名を発見、ひまっことり便りにそえて句を返ってきた。その後「あ句賞賞」や、「二賞候補」にもえらばれ、持家がたのむめる人で、今は二盟のママさんである。

★山田道留字さんは同姓だが他人である。この人は戦後まもなくぼくについてき



EASY CARE / 手のつかからないい
東レトリート
レインコート
HYDRON[®]

東レ株式会社



さすが、わかかていふじやな。



サントリービール〈純生〉

ご当地
ビールは？

昭和四十一年六月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年七月二日発行（毎月二日発行）
創刊大正十三年 通巻五五四号

川柳塔 七月号

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

〈ホテル・旅館〉

- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| ◆白浜温泉
国際観光旅館 朝 日 | ◆徳島鳴門
国際観光旅館 鳴 門 |
| ◆勝浦温泉
国際観光ホテル ホテルパシフィック | ◆国際観光旅館 鳴門公園ホテル |
| ◆湯峰温泉
国際観光旅館 中 の 島 | ◆紀北橋本
観光旅館 紀 の 川 苑 |
| ◆新和歌浦
国際観光旅館 湯 の 峯 荘 | ◆泉南淡輪海岸
観光旅館 淡 の 輪 苑 |
| ◆新和歌浦
国際観光旅館 萬 波 | ◆大阪なんば ホテル南海 |

お問合せ・お申込み 南海交通社
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06-(631)-0222



南海電鉄